
幻想少年

amin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想少年

【Nコード】

N4292N

【作者名】

amin

【あらすじ】

好きになった人は私の全てを見ても好きでいてくれるのだろうか。

* 夢想少女と話がリンクしています。こちらはヒロインサイドの物語です。

1 彼の名前は一之瀬春哉

「どうしてあんたが残ったのよ！あんたは幸じゃない！幸を返して
！！」

そう言っただけ泣き叫んだ母さんは、いつもの母さんじゃなかった。

ああ否定するんだ、あたしを。全てを捨てて自殺しようとした臆病者の倉田幸だけを見てるんだ。

じゃああたしは何者なの？倉田幸って誰？

1 彼の名前は一之瀬春哉

あれから何年経ったわけ？思い出せない。でももう1人の幸は未だに眠ってるし、母さんも大分落ち着いてきた。今のところは安定してる。

対人恐怖症なもう1人の倉田幸を起こさないために、極力人との関わりを自ら断った。そのお陰で皆があたしを疎ましがっている。特に女子が。

母さんは若いころすごくモテたって話を聞いた。その母さんの容姿の遺伝なのか、いつのまにか氷のマドンナってあだ名をつけられて、見た目だけで男が寄ってくるようになった。うざったい奴ら。そしてまた1人。

「あのっ……俺、一之瀬春哉って言うんだ！えと……ずっと好きでした！良かったら俺と付き合ってください！」

今月は告白2回目か。もう相手の名前も覚えるのも面倒だ。しかも

この男に見覚えはない。

同じ学年みただけでクラスも違うし、正直言って勝手に見られて勝手に好かれてるなんて気持ち悪い。

この手の男は皆同じ。あたしを見た目だけで判断してる。そんな奴とかかわるのも億劫だ。

「悪いけど付き合えない」

バツサリ切り捨てたあたしに男は露骨にショックを受けた顔をして固まってしまった。

相手にするのも面倒だったから、あたしはそのままそいつを置いて教室に戻る事にした。

あんたみたいなのは普通の女子と付き合っただけで普通に生きたらいい。どうせあたしの気持ちなんてわからない。

教室に戻ったあたしにクラスメイト達の視線が向く。

そしてヒソヒソと話している女子の横を通り過ぎたあたしの耳に聞こえてきたのは中傷。

「マジで愛想悪いよねー倉田って」

「調子のつてんだよ。少しモテるからって」

モテるってそんなにいい事？正直あたしから言わせてもらえば、あんたたちの方が羨ましい。

あからさまに見せつけるかのように左手の薬指にはめられてる指輪。ブランドじゃ無さそうだけど、それでも好きな人に貰えば価値あるものになる。

そんな人がいるのに、なんでモテる事を望む？好きな人が自分を好きでいてくれたらそれでいいじゃない。

きつとあたしにそんな相手は現れない。もう1人の倉田幸の存在を

知れば皆気味悪がる。

それは初めての彼氏だったあいつだってそうだった。

誰も信じない。あたしは1人でも生きていける。自分の全てを明かす真似はせず、表面上だけ繕って……楽と言えば嘘になるけど、気味悪がられるよりは数千倍増しだ。

あんな達はいいいね。毎日楽しそうで。

その思いを込めて視線を送ったら、相手は一瞬肩を震わし、あからさまに目を逸らした。

放課後になり、他の生徒たちが帰って行く中、あたしは寄る所があった。

今日は診察夜からだし、少し時間を潰さなきゃいけないわけだけど。家に帰るのも面倒だから渋谷にでも行こうかな。

席を立ちあがって、病院に向かうまでの時間潰しのプランを考える。でも特に何も浮かばず、結局渋谷でウィンドウショッピング。

同じ高校生がいっぱい集まってる渋谷を1人で回る。

こういう時間は嫌いじゃない。好きなものを好きなだけ見れる。

案の定あつという間に時間は過ぎ、診察の時間になったあたしは病院に向かうことにした。

病院は相変わらず混んで、1つの椅子に腰掛けて自分の名前が呼ばれるのを待つ。

医療事務の人が名前を呼んで、会計を事務的に済ませていく。

「お大事に」なんて口では言いながら、本当は何も思っていないだろうな。だって言った後にすぐ視線を逸らして金の計算し始めてる。病院だって商売だ。医療事務だって一緒。医師だって看護師だって薬剤師だって商売だ。

口では何とでも言いながら、治そうなんて心から思ってる奴がどれ

だけいるの変わらない。

自分の名前が呼ばれて診察室に入る頃には、もう3、4人しか患者は残っていなかった。

「こんばんは幸ちゃん。具合はどうだい？」

「いえ、悪くはありません。いつもと同じです」

「そうか、それは良かった」

少し年老いた医師がニコニコ愛想笑いをしながら、カルテに色々書きこんでいく。

何か思い出す事はない？とか周りの様子は？とか、言ったところであんたに何ができる。

周りの様子？そんなの最悪に決まってるだろう。だから誰ともかわらず、1人でやってるんだ。

今日だって母さんはきつとあたしを待たずにさっさとご飯を食べて風呂に入って寝てるだろう。あたしの事なんてまるで忘れてしまったかのように生活してるに決まってる。

そう考えれば悔しくて手が震えた。それを見た医師は眉を下げた。

「幸ちゃん、落ち着いて。お母さんとは少し会話したかな？」

「はい、最低限の会話ならしてます。捨てられたら困るんで。でも向こうはあたしの事をもう忘れたがってるんですよ。それだけは分かります」

「幸ちゃん……」

「だって未だに言ってくるんですよ。無意識なのかもしれないけど、幸はこれが好きだったよねって言ってオムライス出してくるんですよ。それを好きだったのはあたしじゃなくてもう1人の倉田幸なのに！」

語尾が荒くなつたあたしを医師が慰めようとしてくる。でもそれが

憎たらしい。

「可笑しいでしょ？笑えるでしょ？この事他の患者に話したら、きつと皆うつ病だつて治るよ。家族に忘れられた子がいるんだよつてだから君はまだ不幸じゃないよつて！」

「幸ちゃん、そんな事しないよ。辛かったね……」

「馬鹿にしないでください！辛いなんて先生に何が分かるんですか！？ただお金もらつて事務的に言つてるだけでしょ！？」

他の患者と違うと思つてた。自分は精神病じゃないつて。

うつ病の人のように切れ散らかしたりしないし、塞ぎこんだりしないつて思つてた。でも今のあたしは何だろう。これじゃ確実に……俯いたあたしの頭を医師が優しくなでる。

「確かにお金は受け取つてるけど、先生は幸ちゃんが元気に過ごしてほしいつて心から思つてるよ。それはもう1人の幸ちゃんじゃない、君の事だ」

「……」

「その為にも、お母さんと少しでもコミュニケーションを取らないと。今度お母さんを連れておいで。先生と3人で少し話をしよう」
「……はい」

医師はにつこりと笑つて、この間のテレビ面白かったね。と話し出した。

あたしが前に好きだつて言つてたバラエティを医師は覚えてくれていたようだ。

この人だけは違う。あたしを理解してくれる。例え同じような事を何十人に言つてたとしても、この人だけは……

診察も終わり、会計をするために待合室に向かったあたしの視界に

入ったのは、今日告白してきた奴だった。
案の定、向こうも驚いた顔をしてあたしを凝視している。

「え、倉田さん……」

「あ」

こいつ名前なんだっけ？ 忘れたけど顔は覚えてる。

なんでこいつがここに？ ここは内科だけど心療内科なんだけど。

でもそれ以上にヤバいと感じたのは、この事を高校の奴らに言いふらされたらどうしようと言う焦りだった。

振った腹いせにやられるかもしれない。そんな事になったら終わいだ。

上手い事も言えずに口から出たのは脅しのような言葉だった。

「誰にも言つなよ」

「え？」

「ここにあたしがいる事。誰にも言つな」

「そ、それはわかってるけど……何で倉田さんはここに？」

それをあんたが知る必要はない。とりあえず、こいつの質問はスル
ーして礼だけ言うことにした。

「ありがと。言われると困るんだよね」

「そりゃな……」

「あんたは何でここに居んの？」

逆に質問すれば、悲しそうにそいつは顔を俯かせた。この表情を知
ってる。母さんがした事があるから。

足が縫い付けられて動かなくなつて、気付いたらこいつが返事をす

るのをジッと待っていた。

「家族の迎えだよ」

「……そう」

そう言つて笑つたこいつに胸が締め付けられた。あたしの母さんもこんな風に笑つて理解してくれたら。

制服に縫われた名前を見て、改めてこいつの名前を覚えた。

それ以上話す事もなく、名前を呼ばれたあたしは会計を済ませて病院を出た。

一之瀬……もう少し話してみたい。あたしの事を理解してくれるかもしれない。話し相手がほしい。

振つた相手に頼める内容じゃないけど、でも彼なら引き受けてくれる気がした。

「話したい……」

ねえ、貴方の事を教えて？

そうしたら私の事も教えてあげる。

2 優しい貴方に

家に帰ったらやっぱり思った通りだった。

リビングの電気は消えて、寝室の電気しか付いていなかった。

テーブルに置かれたご飯は既に冷たくなっており、なんだか食べる気も起らなかった。

2 優しい貴方に

結局ご飯も食べずに風呂に入って寝たあたしは、次の日の朝は空腹に見舞われた。

母さんに最低限の事を話して、作ってくれたご飯を食べて家を出た。朝も少ししか食べなかったし、昼まで持つか？弁当買うついでにお菓子も買おうかな。

コンビニによるために毎朝少し早く出る。今日はなんの冷麺にしようかな。

この時間、通学路に面してるコンビニにはあたしと同じ制服の学生や、同じ通学路にある違う高校の生徒が多い。

冷麺をジツと見てると、不意に誰かとぶつかって持っていたポツキ―を落としてしまった。

「あつ……」

「あーすいません！」

少し大きな声で謝ってポツキ―を拾って渡してきた男の子、オレンジに近い茶髪に耳に開けられたピアス。

少しだけ幼く見えるから多分高校1年生なんだろう。制服が違うか

ら桜ヶ丘の生徒だ。

小さく頭を下げてポツキーを受け取ったあたしに、その子はもう一度頭を下げて冷麺を選び出した。

「広瀬ー何してんだよーお前マジでドジだよなー」

「うつせ。お前から言われたくねえっつーの。大体お前今日部活どうした」

「今日は朝連ないんだよな。でもまさかここで広瀬に会うつて思わなかったし」

「お前がコンビニでジャンプ読んでるの見た時、マジ俺だってびびったわ。ジャンプどうだった？」

「え、やばいんですけど。エース死んだんですけど」

「マジ！？でもなんかあれ死亡フラグ立ってたもんなあ……ちよつと中谷なんとかしろよ」

「俺がルフィだったらきつと助けれてたのに……っ」

「いやお前ウソップ程度がお似合いだつて」

「じゃあお前はチョッパーだな」

「……俺は既に人外か」

何だか少し微笑ましい会話をしながら隣の子は冷麺を選んでいる。

その横ではエナメル製のスポーツバッグを抱えている短髪の男の子。野球部が背負ってるバッドを入れる鞆も持ってるから、多分野球部の子なんだろう。

隣の子は冷麺を1つ手にとって、その子と一緒にレジに向かって行った。

特に食べたいって冷麺もなかったし、今日はあの子と同じのにしてみようかな。

そう思つて、同じのを取つてあの子たちの後ろに並んだ。

「しちキとから揚げ君のレッド1つお願いしまあす！」

「中谷お前どんだけ食うんだよ。お前いつもデケエ2段弁当食ってんじゃない。しかもお前パンも買うんだろ」

「え？！チキとから揚げ君はHRが始まる前に食って、このパンは2限目が終わって食うんだ」

「しかもお前いつも売店でパン買ってんじゃない」

「だってもたねえし、あ！会計はこいつのと一緒にで！」

「待て！俺に奢れって言うのかよ！」

「だって俺小遣い前で金ねえし。全財産今400円だし。これで3日間乗り切らなきゃなんねえから」

「最初から払わす気だったな……てめえ覚えとけよ」

あたしだって持っていないのに、ポケットからGUCCIの財布を取り出して、その子が自分の冷麺と友達の分のお金を払う。

店員はおばちゃんだったから、2人のやり取りを微笑ましそうに見ていた。

奢ってもらった子は勢いよく頭を下げてお礼を言った。少しげんきんだけど、明るくて面白そうな男の子だ。

「よし！朝の食糧は調達！昼は桜井達に払ってもらって一部活行く前に池上に売店でお菓子買ってもらって一部活帰りは栄太達にコンビニでなんか奢ってもーらお！」

「お前どんだけたかる気だ……」

「まあまあいいじゃん 早く行こうぜー！から揚げ君が冷めちゃう」

「奢ったんだから1つ寄越せよな」

「いーよー」

2人は笑って話をしながら自転車に乗って行ってしまった。

楽しそう、あたしとは大違い。あんな風に笑いあえる人がいたら、きっと学校も楽しいだろうに……

そう思いながら、あたしはコンビニの袋をぶら下げて学校に向かっ

た。

昼ごはんは教室で食べて、そのままのんびりしてたけど、5限目が嫌いな社会と言うのを思い出して、あたしは逃げるために屋上に向かった。

授業開始10分前を切っていたので、屋上に人はもう少ない。

授業なんて出なくてもいいや。親が担任にあたしは精神病って相談してるから、先生たちは下手にあたしに何も言ってこない。自殺でもされたら敵わないからね。

放っておかれるのは慣れっこだ。今更構われても鬱陶しいだけ。今の状態が一番楽だ。

次第に人は減っていき、ついに屋上はあたしだけが残っていた。

真夏の暑い屋上で、影のある所でボーっとする。影がある所で動かずにいたら、汗をかく事はないし丁度いい。

そのままボーっとしてたら屋上の扉が開いた。

あたしと同じさばりに来た奴かな？そう思って振り返ったら、そこには昨日の男子の姿だった。

一之瀬だ……

そう心で呟いて、彼をじっと眺めていたが、何だか気恥しくなつて隠れてしまった。

一之瀬はケータイを忘れたらしくて、見つけたことにホッとしていた。

このまま帰っちゃうのか。折角話そうと思ってたのに……でも話しかける勇氣もないし、まあいいか。

そう思っていたら目の前に影が見えた。顔を上げた先には一之瀬の姿があった。

「倉田さん」

「あ、あんたこないだの……また会ったね」

あくまで平静を装って知らなかった振り。あたしの返事を聞いて、一之瀬は少し困ったような顔をした。

そんなきまずそうにするなら話しかけてこなかったらよかったのに。何か言いたい事でもあるのかな？そう思って一之瀬が話すのをジッと待った。

「授業は？もう始まるけど」

「出ない。今日はそんな気分じゃない」

どうしてももう少しオブラートに言えないのか。完全に一之瀬縮こまってるんじゃない！

もう聞く事がないのか、いかにもこの場から去りたいって顔をするのに、少しだけむっとなった。

でもあたしは話したい事がある。ねえ、お互いに相談相手がほしくない？

あたしは遂に話を切り出すことにした。

「昨日さあ、家族の迎えって言ってたじゃん。家族何か病気なの？」

「そう言うのはちょっと……」

「ああ、ごめん。悪気はなかったんだけどさ、あたしとあんた同じかなあって思ってた」

案の定、一之瀬は困った顔をして教えてはくれなかった。でもあたしは更に追求するように、話を引き延ばした。

興味を持ってほしい。痛みに気付いてほしい。慰めてほしい。1人じゃないって実感させてほしい。

あたし達はきつと似た者同士だと思うから。
やっぱり一之瀬もあたしの精神疾患を気になっていたのか、話に食いついてきた。

「倉田さんこそ何で行ってたんだ？倉田さんも……その」

「半分あつて半分間違い。あたしは何の疾患もない」

「じゃあ……」あるのはもう1人のあたし」

分らないって顔をした一之瀬が少し可笑しい。まあこの言い方やわからないよね。

あたしが二重人格だって、きつと一之瀬は思ってない。うつ病か何かだと思っただけだから。

「昨日あんた見てさ、あたしと同じだと思っただよ。めんどいよね、精神病患ってる奴って」

「そんな言い方……好きでそうなってんじゃないだろ。奴とか言うなよ」

「優しいね。あたしは嫌いだよ。面倒くさいし、ム力つくし、邪魔だし」

「倉田さん！」

あんたは優しいね。あたしはそんな風に優しくなかなれないよ。倉田幸は憎たらしい。自分からあたしを作っただけで、平気であたしをこの残酷な世界に1人だけ投げ捨てた。

おかげで今あたしがどれだけ苦しい思いをしてるかも分からずに、すやすやいつまでも寝続けやがって。

あんたはそれでいいかもしれないけど、あたしは疲れてるの。あたしだって少しくらいはいい思いする権利あるでしょ？

「ね、あたしあんたになら色々話せる気がするんだよ」

「話せる？」

「相談できないんだよ。自分の事、誰にも。同じ悩みを持つてる奴じゃないと」

「……」

少しだけ考えて一之瀬は頷いた。

やっぱり一之瀬だって相談する人欲しかったんでしょ？こういう事、普通の友達にだって中々相談できないもんねえ。

一之瀬が腰かけたのを見て、早速本題に入ろうと促した。

「じゃあ話そ。どうせ授業もう始まつてるし、あんた入れないっしょ？」

「誰のせいだよ」

「細かい事言わないの。まずはあんたからね」

あたしがそう言えば、一之瀬はずっと我慢してたのを爆発させるかのようにマシンガントークをし出した。

母親がうつ病で辛い。進学できるかが不安だ。いつ母親が治るか分からない。今の生活が正直言つてきつい。母親を見るのが辛い。

そう言つて泣きそうになって話す一之瀬には純粹に母親を心配してる。

まあその中に少しだけ進学とか自分にかかわる事が入ってるあたり、ちやっかりしてるんだろうけど。

でも母親が治つて欲しいって心から思ってる。やっぱりあんたは優しい人だよな。

そんな一之瀬になんて答えたらいいか分からず、とりあえずティッシュを投げて、先生の受け売りの言葉を投げかけた。

「難しいよね。そういうの……相手の心が読めたらいいのに」

「それ思つよ。心理状態マニュアル本が欲しいよな」

「欲しい欲しい！そしたらあたしも……」

「倉田さん？次はそっちの番だぜ」

言葉に詰まったあたしに、一之瀬は首をかしげてあたしの話を待っている。

そんな一之瀬にあたしは忠告した。

「気味悪がらない事。いいね？」

「え？う、うん」

口ではそう言ったけど、なぜか一之瀬は大丈夫だと心の中で勝手に思い込んでた。なんでかは分からないけど……

「倉田幸は幼いころに父親に虐待を受けてた。身体的なものも精神的なものも性的なものも」

「……」

「母親は気付いてくれなかった。倉田幸が泣きついててもね。そして父親の虐待の恐怖から逃れる為に、倉田幸にもう1つの人格が生まれた。無意識に父親に会う時はその人格を前に押し出して隠れる事で倉田幸は平穏を得てた。結局父親と母親が離婚して母親に引き取られたから今は交流ないけどね」

「それって……二重人格……？」

ここまで言えば分かるか。

一之瀬は目を丸くしてあたしを凝視している。信じられないとでもいった顔をして。

そう、あんたの言った通り、あたしは二重人格だよ。認めたくはないけどね。でももう少し聞いて、話はまだ終わってないから。

「一度出た人格は消えない。無意識に作りだしたから倉田幸はもう

片方の人格の存在に気づいてない。だから第2の人格が出てくる間の記憶がない事に恐怖を抱きだした。記憶が抜け落ちてる自分に……」

「そして倉田幸は自殺を決意した。飛び降りる。それを寸前の所であたしが止めたんだよ。それ以来眠ってる」

「じゃあ今の倉田さんは……」

「そう。あたしの方が第2の人格って事。本当の倉田幸は眠ってる。ずっと、何年間も」

幸、あたし初めてあんたを他人に紹介したよ。あたしの恥でもあるあんたをね。

一之瀬は難しそうな顔をしてる。ああ、もしかして気味悪がってる？それともあたしを偽物だっと思ってる？

「あんたもあたしが偽物って思う？倉田幸の偽物」

「え？」

「あたしは第2の人格、本人格じゃない。母親はあたしが二重人格だっけ事ももちろん知ってる。言われたの。偽物が表に出るなって本物を返せって」

自分で言っても思い出しても胸が痛む言葉。自然と感情的になって早口になっていく。

「あたしはもう1人の倉田幸。演技なんかじゃない。本当にもう1人の自我。だけど母親はそれを分かってくれない。全てを逃げだして自殺しようとした卑怯者が本物って言うんだよ。あたしは偽物の一言で片づけられる。今は言われる事はないけど、きっとそう思われる」

「……俺は今の倉田さんしか知らない。だから今の倉田さんが倉田さんと思えない」

「そう」

「俺のお袋はさ、うつになつてから自分が必要じゃないと思われる事に以上に怯えてる。役に立たないって……」

「……」

「でも役に立たない人間なんている訳ないし、ましてや家族を……」

「あたしは言われた。それは本物の人格だからだよ。あたしは後から生まれた人格、母親のお腹から生まれた訳じゃない。倉田幸の精神がアメーバみたいに分裂してあたしが生まれたんだ。だから母親は自分の子供じゃないと言ってあたしを嫌う」

「じゃあ友達でも作ればいいだろ。そしたら必要としてくれる人が出来る。何で友達を避けるの？」

「倉田幸を起こさない為だよ。こいつは極度の対人恐怖症だから。起きたら泣き喚きだす。あたしなんか抑えられる存在じゃない。だから眠らせとくんだ。ずっと静かに」

まくしたてるように言えば、一之瀬は悲しそうな顔をしながらも、どこか受け入れてくれるような顔をした。

やっぱりこの人ならあたしを理解してくれる。この人の前ならあたしはあたしでいられる。そう感じた。

一之瀬があたしの事をどう思ってるかなんて考えもしなかった。

気味悪がらないでね。

もう貴方しか頼る相手がいないの。

3 これは恋かしら

一之瀬は5限が終わったなら6限は受けると言って教室に戻っていた。

なんだか少しだけ気分がすっきりした。話しかけて良かった。もういいや、6限なんて出なくても。

3 これは恋かしら

結局6限もさぼってHRだけ参加して今日の学校は終了。皆がささと帰っていく中に混じって、あたしもささと学校を出た。

1人で帰っていると、少し前の方に見慣れた後姿。今日話したんだから間違いない、あれは一之瀬だ。

話しかけていいのか迷ったけど、向こうも1人で歩いてるんだから別に話しかけてもいいよね。

そう思っ、普段学校では出さないような大きな声を一之瀬に向けて放った。

「いーちのせ」

「あれ、倉田さん」

一之瀬が気付いて、こっちに振り向く。それに手を振って、あたしは一之瀬の所に少し早歩きで向かった。その光景を何人かのクラスの奴らに見られたけど別にいいや。見られて悪い場面でもないし。一之瀬は当たり障りない会話を投げかけてくる。昨日のテレビとか、欲しい服があるとか。でもあたしが会話をし出したら自分の話を中断して、聞く姿勢に入ってくれる。

多分この姿勢は家族の人に精神疾患の人がいるから培われたんだろうな。そう思いながら、その好意に甘えて自分が話したい事をいっぱい話した。

友達がいらないから、こんなの話せる人他にいなかったから、なんだから嬉しくて楽しかった。

ある程度、話したい事を話し終え、あたしは少し気になった事を一之瀬に聞いた。

「一之瀬、今日はおばさんの迎えに行くの？」

「いやーあれは時々だから。いつもは親父が仕事帰りに迎えに行くんだよ。それにお袋が病院行くのは大体朝だから、こないだは特殊なケース」

「ふーん……」

なんだか少しだけ一之瀬が話したくなさそうだったから、この話はこれでお終い。また自分の趣味の話をし出したあたしを一之瀬は笑いながら聞いてくれた。

一之瀬と別れて家に帰っても誰もいない。母さんはまだ仕事のはずだ。何だか今日は気分がいい。久し振りにあたしが何かを作ろうかな？冷蔵庫を開ければ、結構な食材が中にあった。これは中々豪華なのが作れそうだ。

「これは幸が作ったの？」

「そう」

適当にそう答えて母さんの分の皿も出す。

あたしが料理したのなんて多分片手で数えるくらいしかないはずだ。母さんもあたしが殊勝な事をしたことに驚いている。

でも特に会話が弾む事もなく、母さんは有難うだけ言って服を着替えて手を洗って席についた。

「美味しいわね。あんた料理上手いわね」

「別に普通じゃない。本見たら間違えるなんてないし」

「そう？でもなんで今日はこれを作ったの」

「これが好きだから」

それだけ答えれば、母さんは食べていた箸を置いた。

「そう、あんた肉じゃがが好きだったのね。意外に和食派ね」

「別にいいじゃん。好きなものは好きなの」

「他には？何かないの？」

母さんに質問されて驚いた。そんな事聞かれるなんて思ってたから。

口ごもったあたしに母さんはずっと待ってくれた。でも上手く答えることなんてできなかった。

「和食なら何でも好き。でも洋食も好きだけど……ええと……」

「あんた好き嫌いないんじゃない？ふふ」

「そ、そうかも」

笑った母さんを久しぶりに見て、何だか心が温かくなった。

今日料理して良かった。心からそう思えた。

この事を一之瀬に話そう。そう思って次の日、あたしは学校に向かった。

話す相手が一之瀬しかいないあたしからしたら、早く一之瀬と話したくて仕方がない。

向こうは友達がいっぱいいるみたいだけど、でもあたしには一之瀬しかない。申し訳ないけど付き合ってもらうしかないのだ。

昼休み、一之瀬がクラスに遊びに来た。願ってもないチャンスに一之瀬の所に駆け寄ると、クラスメイト達の視線があたしに向かう。一々あたしに気にしなくてもいいよ。あんたたちは自分の好きなことすればいいのに。教室の前にいたくなくて、一之瀬と人通りの少ない場所まで移動した。

「今日友達に倉田さんと付き合ってたのかって聞かれたよ。一緒に帰ったから」

「はあ？」

何それ。一緒に帰ったら付き合ってたとか、どんだけなんだよ。

そう思ってた。呆れた声が出たあたしに一之瀬は慌てて否定しといたから！と弁解してきた。

でも今話してるこの状況でも勘違いされるんじゃないかな。そんな事一之瀬が言うもんだから一之瀬は少なからずこの状況を快く思っていないって事だけ理解できた。なんか少しだけシヨックだけど仕方ないよね……

「そーだ一之瀬、アド教えてよ」

「アド？」

「そうそう。学校であんま話せないからメール」

「それはいいけど」

思い切ってそう聞いてみれば、一之瀬は特に気にする事もなくアドレスを教えてくれた。

他人のアドレスなんて最低限しか入ってないケータイにも遂に役目が回ってきたようだ。

今まで放置気味だったけど、これからは肌身離さず持っておこう。

そう心に決めて有難うと告げれば、一之瀬は顔を赤くして首を横に振った。

でも急に真面目な顔をして話しかけてきた。

「もう1人の倉田さんってどんな子？性格とか」

なんでいきなりそんな事を……あんな奴どうだっていいじゃん。

少しだけムカついて、眉をしかめたら、一之瀬は少しだけ慌てた表情を見せた。

「どうでもいいじゃん。かんけーない」

「ごめん」

「別に、じゃあね」

なんかむかつく。聞いてこないでよそんな事。今日の前にいるのはあたしなんだから、なんでもう1人の幸の事を聞いてくるのかマジで訳わかんない。

結局その後、一之瀬と話す事もなく、あたしは今日の学校を終えた。

「……送ってもいいものか……」

家の帰ってから、あたしは悩んだ。

一之瀬にメールを送っていいかどうか。だって向こうからは来てないし、多分今はバイトの時間なのかもしれないけど。

いきなり切れて帰ってしまっただけで、今更メールとか少し送りづらい。でもあたしが贈らなくて一之瀬は送ってきてくれないかもしれないし……あーどうしよう！

悩んだって仕方ない！とにかくまずは謝って何とかしよう！そう思

ってあたしは簡潔に用件だけを書いた。

『今日は何かごめん。少し感じ悪かったなって思った』

暫くして返事が返ってきた。

ケータイを横に置いてたので、すぐにあたしは画面を開いた。

そこには『気にしてないよ。俺こそごめん。今バイト終わったんだ』と書かれていた。

これは返信していいのかな？でもすぐに返信したら引かれるかな？10分くらい待った方がいいのかな。でも早く返信したい！

とりあえずしばらく時間をおいて返信することにしたけど、こんなに時間の進みは遅かったかな？

早くして！そう思いながら既に出来上がってるメールを何度も読み返した。

誤字はないかとか、愛想無いと思われないかとか……色々不安だったけど、でももういいや！

メールを送って、今か今かと返信を待ちわびた。

酷く滑稽でしょ？

なんだかこれって私が貴方に恋してるみたいじゃない。

4 少しは気にして

「あの、倉田さん……ちょっといいかな」

話しかけてきたのはサッカー部に所属している同じクラスの石原だった。

明るくてクラスの人気者、そんな奴が浮いてるあたしに何の用なんだろう？そんな簡単な事は思わない。

だって顔を赤くした石原を見れば、何の要件かはすぐに見当がついたから。

4 あの日の彼

石原が話しかけてきた事にクラスの女子たちが一斉にヒソヒソと話し出す。

それを少し気まずそうにしながら石原は、あたしが話を聞いてくれるかと言うのを待っている。

まあ聞くだけなら、答えは決まってるんだけど。

そう思いながら、OKの返事をしたあたしに石原は嬉しそうに笑った。その姿を見たら、何だか申し訳なくなってしまった。

石原と教室を出て、中庭まで移動する。

まだ朝のHRは始まってないけど、流石にこの時間から生徒がこの場所にいるわけではなく、がらんとした中庭にはあたしと石原しかない。

この状況だったら、どんな声でも聞き逃す事はなさそうだ。

石原は赤くした顔を隠す事もせず、もじもじする事もなく、勢い良

く頭を下げた。

「俺、倉田さんの事が好きなんだ！俺と付き合ってくれ！」

勢いよく言われることなんてなかったから、少し戸惑ってしまった。早く断れ。そう頭の中で思っているのに、必死な表情をしている石原を断る事が出来なかった。

だって石原は幸が好きだった小学校の頃の初恋の相手だった吉井にそっくりだったから。

吉井もサッカーのクラブに入ってて、クラスで人気者、明るくてクラスを中心人物で、皆あいつの周りに集まって……

気が弱い幸は話しかける事も出来なくて、いつも日記に吉井の事を書き綴っていた。

その数カ月後に幸は自殺を決意して、あたしが倉田幸にとってかわった。つまり幸にとって吉井は今でも初恋の相手なのだ。

その吉井に雰囲気がそっくりな石原。そんな相手をあたしが振ってもいいのか、そう思ってしまった。

そして出た言葉は今まで発した事のないものだった。

「少し……時間くれない？」

石原は待つてると言ってくれた。だから一生懸命考えて結論を出さなきゃいけない。

何に？大体あたしは石原の事を好きなんかじゃない。答えが決まっているのに何に結論を出そうとしてる？

なんであたしが倉田幸の事を気にかける？あいつとあたしは全くの別人じゃない。

そうだ、何も関係ない。あたしは石原に恋愛感情なんて抱いてない。

さっさと振っちゃえばいいんだ。

帰りのHRが終わって、石原はサッカー部の奴らとさっさと部活に行ってしまった。

アドレスも知らないあたしは直接話をつけなきゃいけないから、今日はもう返事をするのは無理だろう。

……帰ろう。

そう思って鞆に荷物を詰めてるあたしをクラスメイトの視線が襲う。石原に呼び出されたあたしの返事がどうにもこうにも気になるみたいだ。でもその事はどうやらクラスメイト達は知ってたみたいだった。

「やっぱり石原君、倉田さんに告つたらしいよ」

「え？マジで！あり得ない……なんで倉田なの？」

「ってか今回は倉田さん考えさせてっていったらしいよ。赤井が言ってた」

「はあ！？マジ？じゃあ倉田も石原に気あるわけ？」

何もそんな本人に聞こえるように話さなくても……

溜め息をついたあたしは鞆を肩にかけて教室を後にした。

やっぱり学校は気まずい。あんなに堂々と人の恋愛事情を暴露されたらプライベートもくそもない。

あたしはどうって事ないけど石原が可哀想。

帰りにグラウンドを少しだけ覗いてみた。まだサッカー部は練習が始まって無くて、数人の生徒がグラウンドでリフティングをしてアップをしていた。

座れる所を探して腰かけて、少しだけ様子を見てみると、石原が体操服に着替えてグラウンドに入ってきた。

その瞬間、数人の生徒が石原の所に集って、仲良く騒ぎ始める。

やっぱり石原はどこに行っても中心人物見たい。

楽しそうにパスを出し合っている石原を眺めると不思議な気分になってくる。

この暑い中、影のある所に移動しないで皆がボールを追いかけてる。一生懸命になってる姿がとても格好良く見えた。

これはモテる対象だな。そう思いながらグラウンドを眺めていると、不意に肩をたたかれた。

「倉田さん、珍しいね。見学してるなんて」

「……委員長」

話しかけてきたのはクラスの委員長の藤田美紀だった。

委員長も体操服を着ているって事は、もしかしたら部活かなんかなんだろうか。

立ち上がるうとしたあたしを委員長は座らせてサッカー部を眺めている。

「もつと近くで見なよ。ここじゃあんまり見えくない？」

「別に……そんな長時間見るわけじゃないし」

「そうなの？でも倉田さんが見てくれたら石原きつと喜ぶと思うけど」

ああ、やっぱりあんたも知ってるんだ。本当に石原があたしの事を好きってこと、皆が知ってるみたいだね。

じゃあ委員長はなんでこんな事を？あたしをただ単にからかいたいだけ？

視線を下にずらせば、委員長の足元にはプラスチックの籠に入った大量のペットボトル。

中に水が入ってるのを見ると、かなり重そうだけど……
あたしがそれを見てるのを気付いた委員長が笑いながら籠を持ち上げた。

「あたしマネだからさ、見学にいい場所知ってるよ」

「重くない？」

「慣れっこ。マジ腕っ節強いよあたし」

につこり笑った顔からは悪意など微塵も感じ取れなかった。
少しだけ笑い返して視線を石原に戻すと、委員長は籠を地面に置いてその場に中腰になった。

「あたしさー石原の幼馴染でさ、倉田さんの事、石原から相談受けたんだよね」

「え？」

「話した事ないけど可愛い子がいるんだ、って。倉田さんって聞いて納得だったけど……まさか告るとは思わなかった」

「……」

「でも倉田さんは見学にわざわざ来てる。少しは脈があるって思ってもいいんだよね？」

「それは……」

「大丈夫、あいつは我慢強いから。ゆっくり考えてくれればいいよ」

なんでこの人は他人の石原にそこまで言えるんだろう。

幼馴染だから家族同然なのかもしれない。ますます断りづらくなっちゃったじゃない。

あたしに挨拶をして委員長はサッカー部の所に向かっていく。なんだかあたしがいるのが石原にバレそうで、あたしは逃げるようにして、その場を後にした。

帰りを1人で帰っていると、少し離れた所を一之瀬と一之瀬のおばさんが歩いてた。

一之瀬は買い物袋を持ちながらも、おばさんと楽しそうに会話をしている。

なんだ……一之瀬の家は何だかんだ上手く言ってるんだ。良かった

……心からそう思えた。だって一之瀬は友達だし。

友達？友達なのかな……そう言えばあたしたちの関係って何だろう？あたしが一方的に迫ってるだけで、向こうは友達って思ってるんじゃないかもしれない。だってあたしは一之瀬の告白もこっぴどく振った訳だし。

何だか気分悪くなってきた。早く帰ろう……

「昨日、おばさんと歩いてたじゃん。見たよ」

次の日、登校中の一之瀬を見つけて話しかけたら、一之瀬は少し気恥ずかしそうにしていた。

見られたかって言って笑う一之瀬が何だか可愛らしく感じた。

一之瀬は家族思いだ。多分あたしが今まで知りあった同い年の人中で一之瀬が一番家族思いだと思う。

そんな一之瀬が幸せそうに笑うのはいい事だ。きつとこんな風に笑ってくれるんだから、あたしの事だつてきつと嫌ってはないはず。

勝手にそう思い込んで、そのまま一緒に登校した。

「あれ？倉田さんって石原と付き合いだしたんじゃないの？あれ誰？」

「確かあいつ3組の奴だよな。あの噂デマなのか？」

急に耳に入ってきた声に睨み返せば、そいつらは顔を背け速足で去

っていく。

何？何でこんなこと言われなきゃいけないの？そもそも石原とはまだ付き合ってたないし、なんで一緒に登校してるだけで一之瀬と付き合ってるって事になる訳？

今の声は一之瀬にも聞こえてたらしく、少し困った顔をしていた。完全にあたしが巻き込んでしまったって感じた。一之瀬は何も悪くないのに……

とりあえず、この場を何とかするために、あたしは敢えて大げさにリアクションを取った。

「マジでウツザ！何であたしの行動がこんなに広がらなきゃいけない訳？」

「しょうがねえよ、倉田さんと石原が付き合ってた噂すっげー広がってるから」

「は？」

一之瀬の返事に目が丸くなった。

一之瀬もこの噂知ってたんだ。多分石原が流してるんじゃないんだろうけど、じゃあ誰が？委員長？でも委員長もそんな事する様なタイプじゃないし……

そんな事どうでもいい。いつのまに付き合ってたって話になった。

なんでそんな話が大きくなってるの？

それになんで一之瀬は普通な顔してあっさり言ってきた訳？

あんた仮にもあたしが好きで告白までしてきて、あれからまだ数週間しか経ってない。あんたにとってあたしはその程度だったって事？なんかムカムカする。

「何それ、訳わかんない」

「でも倉田さんは告白をバツサリって言うので有名だから、考えさせてはすごい進歩なんだよ」

そうじゃなくて！あたしが聞きたいのはそれじゃない！！

「……あんたは嫌じゃないの？」

「え、俺？」

「仮にもあんたあたしに告白してきたじゃん。なのにこんな噂立って嫌と思わないの？」

固まってしまった一之瀬。そこで言葉が出ないって事はそういうことだよ。
はいはい分かりましたよ。あんたにとってあたしはその程度ね。よく分かりました。

「倉田さん」

「うつさい。ばか一之瀬」

何か言いかけた一之瀬を一喝して、先に学校に向かう。

一之瀬のくせに！一之瀬のくせに！一之瀬のくせに！！そう思いながら歩いていつて、ふと我に返った。

あれ？あたしが起こる権利ってなくない？なんであたしが怒ってるの？

だってあたしは一之瀬の告白を振ったんだし。なのに今、何も反応を返さなかった一之瀬になんで切れてる？

あたしは嫉妬してほしかったとでも言うんだろうか。

もうわかんない！ただでさえあたしは頭いかれてるんだから、心までグジャグジャにしないでよ！！

助けてよ。

あたしが助けを求めているのは他の誰でもない、あんたなのに。

5 探りを入れて

結局あの日以来一之瀬と会話をする事なく1週間が過ぎた。石原の件も未だに解決してないあたしにとって、毎日の学校は苦痛でしかなかった。

5 探りを入れて

告白されてから、石原と良く話す様になった。と言っても、向こうから話しかけてくるからそれに答えるだけなんだけど。

石原はやっぱいい奴だった。友達としたら間違いないいい奴に入るだろう。

明るくて面白い。他人の悪口の言わないし、友達が行った悪口に同調する事もない。

根っからのいい人キャラなんだろうな。そう思いながら石原の話を適当に相槌を打ちながら聞いている。

「マジ今度練習試合でさ！俺スタメンなんだよね！」

「すごいじゃん」

「まあ先輩が抜けたから2年の俺たち中心になったからけどね。今年こそは絶対に都大まで行ってやるんだ！」

そう言つて意気込んで笑う石原につられて笑みが漏れる。

藤田さんが言った通り、石原はずいぶん我慢強いタイプらしい。未だに告白の返事をしないあたしにこうやって話しかけてくれるし、急かすなんて事しない。

それに甘えてるだけなのかもしれない。他の女子たちがあたしの方

を見て、ヒソヒソと話をしている。

まああたしの悪口なんだろうけど、もう慣れっ。そう言うの氣にしたら学校なんてとうに行けなくなってる。

減る休みも終わりに近づいていく。あ、今日も確から限って社会だったっけ？面倒くさいな。またさぼろうかな……

そう思つて、席を立ちあがったあたしに石原は視線を送る。

「倉田さん？」

「ちよつと気分悪いから保健室行ってくる」

「大丈夫？」

「うん。ごめん」

心配してくれてるのに嘘ついてごめんね。本当はさぼりたいだけなんだけど……

そう心の中でごちて、クラスを出る。

この時間に屋上に行く人間なんて少ないだろう。階段を下っていく人は見るけど、昇っていく人はあたし以外いない。

屋上の扉を開けて外に出れば解放感。そのままフェンス近くの鉄格子に腕を乗せて、景色を眺めた。

別に景色がいいってわけじゃないけど、それでも屋上から見る景色がなぜか好き。

生徒たちがどんどん屋上を出ていく中、不意に聞こえた声に耳をすませた。

「春哉ー？」

「わりい雅氏先行つてて」

「はあ？」

この声は一之瀬……下の名前春哉って言うんだ。ここで昼ご飯食べただね。

この間も屋上で一之瀬と会ったし、一之瀬は屋上でよく昼休みを過ごしてるみたいだ。

一之瀬がそのまま地面に腰掛けるのが分かる。その音を1つ1つ拾い集めてる自分も少しだけ滑稽だ。

振りかえってジッと見ても、会話をする事はない。むしろなんだか気まずい雰囲気包み込んでいく感じがする。

でもそう思ったのは一之瀬も同じだったようで、困ったように眉を下げた。

「迷惑なら出てくけど」

「別に。いいんじゃない？居ても」

「どうも」

何だか一之瀬に視線を向けられなくて、体を反転させて景色を見る。

一之瀬もそれ以上語る事もなく、黙っている。

刻一刻と時間だけが過ぎていき、会話しない時間が何分過ぎた頃だろう、あたしは勇気を出して一之瀬に話しかけることにした。

「一之瀬ってさ……誰かと付き合ったことある？」

一之瀬の顔を見ないで聞いたから、一之瀬がどんな表情をしていたのかはあたしにはわからない。

でも小さく「えっ」とか「あー……」とか言ってるから多分困ってるんだろうって事だけは分かった。

しばらくすれば答える気になったのか、息を吸い込む音が聞こえた。

「あるよ。中学の時に2人、長く続かなかったけど」

やっぱり一之瀬は彼女いた事あるんだね。まあ一之瀬はいい奴だし、予想してた通りだけど……直で言われると何だか胸が痛んだ。

それを悟られないように質問攻めをする。

「どれくらい続いた？」

「1人は半年、もう1人は3カ月。短いっしょ？」

「どこまで行っただ？」

「どこまで行って……キスまでは行っただ」

「……そっか」

普通の恋人してたんだ。羨ましい……あたしだってそう言うのしてみたいよ。

いや、頑なに逃げてただけかもしれない。しようと思えばする機会はいくらでもあった。現に今だって石原の告白をOKすれば、憧れてたその未来を迎える事が出来るんだろう。

でもそれをしないのは……あたしが石原を未だに恋愛的に好きにはなれないから。そして断れないのは……

「石原ってさ……幸が如何にも好きそうな奴なんだよね」

「幸って……もう1人の倉田さん？」

全てを話してる一之瀬はすぐに理解してくれて助かる。やっぱり相談役がいるっていいことだな。

「小学生の時にさ、幸が初めて好きになった奴が石原そっくりだったんだよね。スポーツマンで明るくてクラスの中心で、幸はあいつといると楽しそうだった」

「うん」

「もしかしたらあいつと付き合ったら幸は起きるのかなーって思ってたさ。そしたら速攻で断る事が出来なかったんだよね。気づいたらいつまでもズルズル引き延ばして期待させて……最低な奴だね。あたし」

「倉田さんは……石原が好きじゃないのか？」

「わからない。付き合ってみたら好きになるかもね。告白されてから話すようになったけど、いい奴だと思う」

「だったら……」「でも向こうがあたしを受け入れてくれないと思う」

そうだ、あたしが例え他人を好きになったって、他人があたしを嫌っていく。

二重人格って事を一生隠し通せる自信なんてあたしにはない。誰かに助けてほしくて、結局隠し通す事なく相手に縋りついてしまう。その結果、相手はあたしから離れていく。もうそれは実証済みだからきつと石原もそうだ。

あたしが放った言葉に疑問を持ったのか、一之瀬が焦ったようにして反論してきた。

「受け入れてくれないって……向こうが好きだから告白してきたんだろ？」

「……二重人格だって知ったら気味悪がられそうじゃん」

「それは……」

「中学生の頃、初めて好きな人が出来て付き合った事があったんだよね。でも二重人格だって事を言った途端ふられた。次の日にはクラス中に気味悪がられた。それ以来かな、誰とも付き合いたくないって思っただの」

今思い出してもすごくショックだったよなあ……向こうから告白してきて、いつも優しくて、この人なら受け入れてくれるって思ってたのに、言った瞬間さよならだったんだから。

思い出しただけで涙が出そう。あの日以来、他人と付き合うとか絶対に嫌だっと思った。

こんな思いするぐらいなら一人でいいやって。そう思ってたはずなのに、やっぱり一人は寂しい。どうしようもなく寂しいよ。

一之瀬は話を聞いて、気まずそうにしながらも、結局あたしが何について悩んでるかを理解しているようだ。

嫌だよね。一之瀬は精神疾患の人とかかわってるから、その手の人の対応に慣れ過ぎてる。楽だけど、鋭いから嫌。

「倉田さんは付き合いたいんじゃないのか？石原と……」

「わからない。今は別に好きじゃないから……」

「早く返事しねえと可哀そうだよ。石原もドキドキしてんだからさ」「わかってるよ」

一之瀬もそうやって急かすんだ。別にそれに文句を付ける気はない。どう考えたってあたしが悪いのは明白だから。

でもさ、やっぱりあんたに言われるのは心苦しいわけよ。

「一之瀬」

「何？」

「……何でもない」

本当は何でもなくない。教えてよ、どうすればいいのか。道を示してよ。

あたしの全てを知ってるのはあんただけなんだから、あんたしか頼る人がいないんだから、あたしを助けてよ。

ねえ助けて。

他人を信じるのは怖いけど、1人はもっと怖くて寂しいの。

6 できれば受け入れてください

「幸ちゃん、明日はお母さんを連れておいで」

いつも通ってる精神科の後藤先生からの電話に思わず一瞬息をのんだ。

母さんに話してもいいんだろうか。それだけが頭の中を占めていた。

6 できれば受け入れてください

仕事から帰ってきた母さんに話しかけるタイミングが見つからない。ただでさえあまり会話がないのに、病院に一緒に来いだなんて、そんなの簡単に言いだせるわけがない。

母さんが気になって橋があまり進まないあたしに、母さんは視線を送ってきた。

「どうしたの幸？どこか具合でも悪いの？」

「いや、そう言う訳じゃ……」

「でも箸が全然進んでないじゃない」

言え、今しかない。

心の中でそう思ってるのに、中々口から言葉が出てくる事はない。何もしゃべらないあたしを不審に思ったのか、母さんが首をかしげた。待つて、まだ終わらないで。

言わなきゃいけない事があるの。だから怒らないで聞いて。お願いだから……

思わず箸をぎゅっと握りしめて、あたしは母さんに真っすぐ視線を

送った。

「今日、後藤先生から電話あった」

「後藤先生から？どうかしたの？」

「明日……診察に母さんを連れてきてほしいって……」

「え？」

案の定、母さんは目を丸くしてる。

そりゃそうだ。いきなりついて来いって言われて了承できるわけがない。どうしよう、怒られたりしたら。

そんな考えばかりがグルグル頭の中を駆け巡り、上手く対応ができない。

暫く黙ってしまった母さんが怖くて、あたしは視線を外して顔を俯かせた。

「……明日は診察いつからかしら」

「17時」

「わかった。じゃあ16時30には家に帰るようにするから一緒に行きましょう」

「行つて……くれるの？」

予想外だった。母さんはつきり行つてくれないかと思ったから。

ああでも行つてくれるか。良く考えたら母さんが病院に付き合ってくれるのは、一刻も早くもう1人の幸の目を覚まさせたいから。

手伝える範囲を手伝うのはきつと当たり前なんだ。

早く母さんはあたしにこの世界からいなくなつて欲しいって思つてるにきまつてる。

そう考えたら、一気に気持ち覚めて、あたしは礼だけを述べてご飯も食わずに席を後にした。

正直、明日が怖い。

先生が下手な事言つて母さんの機嫌が悪くなつたらどうしよう。そんな事ばっか考えてた。

「あのさ、今日良かつたら練習見ててくんないかな」

次の日の放課後、さつさと帰ろうと思つてたあたしを石原が引きとめた。

石原からの告白を受けてもう1週間以上が経過する。なのに未だに返事をしないあたしを石原が咎める事はない。

あれ以来、石原と……特に藤田さんと話す様になった。

藤田さんはいいい人だった。サバサバしてる性格みただから、余計な詮索もしてこないし、いつも明るくて楽しそうだったから。

そして石原も……友達としてはすごくいい奴だつて思う。でもまだ恋愛には意識はいかない。

こんなんだから早く振ればいいのに、振るのも怖い。最低な奴だあたしは……

「ごめん、今日は予定があつて」

「あ……ちょっとでいいんだけどさ」

あたしも本当なら行つてあげたいけど、病院の時間まであまり余裕がない。

だからサッカーの練習を見てる暇がない。でもそんな事を言えるわけがなく、あたしはただごめんとだけ言つて、鞆を持って教室を出た。

後ろを振り向いて、石原の顔を見るのがすごく怖かった。

家に帰って驚いたのは既に母さんがいた事。てつきりギリギリまで帰ってこないと思ってたのに。

母さんはあたしに気付いて、読んでいた本を閉じた。

「早かったわね。車で行ったらまだ余裕があるから少しのんびりしなさい」

「あ、うん。母さんこそ早かったね」

「仕事がちょうどキリのいい所まで行ったからね」

母さんが笑って冷凍庫を開けて何かを出してくる。

「ハーゲンダッツだ」

「あんた好きでしょ？ドラッグストアで2割引きだったから買ってきたの。食べなさい」

あたしが好きなもの知ってたんだ……しかもストロベリー。

母さんに好きって言った事あったっけ？でもそんな事どうでもよかった。ただ母さんがあたしの事をちゃんと見てくれた事が嬉しくて泣きそうになったのを何とか堪えた。

なんだか少しだけアイスがしょっぱく感じた。

20分くらいのんびりして母さんと病院に向かった。

後藤先生は優しくいい先生だから病院は相変わらず患者さんが必ず数人はいる。

予約してたから大して待つ事はなかった。医療事務の人に名前を呼ばれて母さんと診察室に入る。

診察室にはカルテを眺めている先生がいて、あたしたちに気付いて席に座るように促した。

「私、後藤と申します。幸ちゃんのお母さんでよろしいですか？」

「はい、幸の母です」

「実は今日は幸ちゃんとお母さんの日常的な事をお聞きしたいのですがよろしいですか？」

「はい」

なんだか……あたしが先生にちくつたような感じた。空気が重い。先生はカルテを開いて、あたしの今までの記録を呼んでいる。

「この間、幸ちゃんの検査をしたんですけど、最近は少し安定してるみたいなんです。お母さんはいつも幸ちゃんとどんな会話をなさっていますか？」

「会話、ですか……」

気まずそうにしている母さんに申し訳なさが出てくる。迷惑掛けたって病院出た後嫌われそうだ。

なんで先生はいきなりこんな事を聞いてくるんだろう。あんまりじゃない。

涙をこらえてるあたしに気付いてるのか知らないが、先生が話をし出した。

「幸ちゃんの好きなテレビはしゃべくり007なんだよね。幸ちゃんは意外とお笑い番組が好きなんだよね」

につこり笑った先生にあたしは小さく頷いた。それを母さんがじっと見ていた。

「ご飯は和食が好きで、特に肉じゃがが好きなんだよね。後はファッション雑誌を読むのが好きで学校帰りのウィンドウショッピングが好きだったよね」

先生はあたしの事をどんどん話していく。なんだか何でも知ってるような感じた。

でもあたしはいつも診察の時に先生と色んな話をする。あれだけ話してたらあたしの事も大分知られてそうだ。
まだまだ先生のあたしの情報暴露は続く。

「最近映画を見るのが好きって言ってたね。学校も友達が出来たって言ってたし、それが安定してる元なのかもね」

「幸……」

不意に母さんが呟いて顔を上げたら泣きそうな母さんの顔が視界に映った。

「私……何も知らないわ。貴方が何が好きなのか、何が楽しいって思ってるのか……」

「かあ、さん……」

「何も知らない、知らない……」

そのまま泣きだした母さんに何でかあたしまで涙が流れた。

だって母さんはどうだっていいって思ってるんじゃない。母さんがいつだって見てるのはあたしじゃなくてもう1人の幸で、あたしじゃない。

なのに何で泣くの？期待させないでよ、もしかしたら愛されてるなんて錯覚を持つちゃうかもしれないじゃない。
泣いている母さんに先生は優しくほほ笑んだ。

「悲しがる必要はありませんよ。他人の私でさえ、幸ちゃんはこちらまで話してくれたんです。母親である貴方はすぐに私よりも幸ちゃんについて知る事が出来る」

「先生……」

「幸ちゃんは明るくて少し口は悪いけど優しい子ですよ」

何だかちよつとけなされた？そう思ったけど、先生の言葉は優しくて柔らかくて、心が温かくなった。

先生の奥さんは幸せ者だ。こんな優しい旦那さんがいて。

母さんは涙を流しながら、何度も何度も頷いた。先生が言いたかった事が少しだけ分かった。

お互いをもっと知りあって。そう言いたかったんだろう。

診察が終わって母さんと一緒に帰る。

母さんは車を運転しながらポツリと呟いた。

「幸、あなたフランス料理って好き？3000円で食べれるお店をこの間見つけたの？」

「母さん？」

「行ったらすごく美味しくてね、母さんが今一番好きな店なの。一緒に行かない？」

母さんはあたしに近づこうとしてくれる。ならその返事は1つだ。

「行く」

「良かったわ。銀座にあるから車を止めたら少し買い物しましょう。今プランタン銀座でセールしてるじゃない」

「……うん」

少しずつ近づきたい。

ねえ母さん、今はあたしを見てくれるよね。幸じゃなくてあたしだよね？

そう勝手に思えるだけで幸せだった。それだけであたしはきっと生きていける。そう思った。

少しでもいいの。

あたしの事を幸って認めて笑いかけてほしい。

7 貴方だけでは嫌われたくないんです

その日は幸せだった。久し振りに母さんとこんなに話した気がした。フランス料理は美味しかったし、なんだか自分がこんなに幸せでいいのかが分らないくらいだった。

7 貴方にはだけは嫌われたくないんです

朝目が覚めたら、母さんがおはようって言って笑いかけてくれた。テーブルには今まではパンだったのに、珍しくご飯やみそ汁が並べられていた。

「珍しいね、いつもパンなのに」

「たまにはこういうのもいいかなって思ったのよ」

母さんはそう言うけど、これはきつとあたしに合わせてくれたものだ。

たまにはって言ったけど、少なくとも数力月は朝ご飯にごはんは出なかった。それが先生と話して次の火にこれだから絶対にあたしに合わせてる。

やばい、これが幸せってものなのかなあ。

そう思いながら食べた朝ご飯は何だか最近食べてた朝ご飯よりも美味しい気がした。

学校はいつも通りだった。

相変わらず石原はクラスの中心人物で、あたしは未だに告白の返事をしないで、もう2週間も経ってしまった。

クラスメイトだってもう石原とあたしの噂をあまりしなくなっている。

もうこの際、うやむやにしてやろうか。そう思ったけど、それはあまりにも石原に失礼だったから止めた。

早く返事をしなきゃ、でもこんなに待たせた拳句振るなんて物凄い嫌な奴じゃない。あたしは。

でも仕方ない、全部自業自得だったんだ。結局石原の事を恋愛面では好きになれない。それだけだった。

早く言わなきゃ、そう思うのに中々話しかけるチャンスもなく、気付けば放課後になっていた。

石原はさっさとサッカー部の面子と部活に行ってしまった。

話しかけようと思ったのにこっちを見向きもしない。なんで急にこんな風になっただろう。

考えても結論は出ないけど、必死にない頭を絞っていたら声をかけられた。

「倉田さん」

「あ、委員長……」

そこに立っていたのは委員長だった。委員長は神妙そうな顔で、少し話があるから時間あるかな？とあたしに言ってきた。

断る理由もなく、大人しくあたしは鞆を持って委員長の後をついていった。

委員長に連れてこられた場所は、前に委員長がサッカーを見学するいい場所があると言っていたところだった。

そこに腰かけた委員長を見て、あたしも隣に腰かける。

「倉田さん、あたしがこんな事言える義理じゃないけど……早く石原に返事をしてやって」

「え？」

思いがけない言葉に目が丸くなった。でも委員長は辛そうな顔をしている。

「石原最近調子良くないんだよ。なんでかって考えても倉田さんしかあたしには思い当たらない。付き合う気がないんならバツサリ振ってやるのも優しさだよ」

「委員長……」

「そんなに真剣に悩んであげるのはすごくいいことだと思うけど、流石に2週間は長過ぎるよ。待つてる石原の事も考えてあげて」

その言葉に頭を殴られた感覚がした。

あたしはずっと自分に甘えてた。石原に悪いって思いながらも、石原なら待ってくれる。そう思い込んでた。

こんなに待たされていいはずがない。石原はきっと怒ってる。そんな石原に更に振るなんて事できるのかな……

知らず知らずの内に泣きそうになってたらしい、そんなあたしを委員長は笑って励ました。

「そんな顔する必要無いよ。倉田さんは一生懸命考えてあげたんだから。もしそれであいつが怒ったらあたしがぶっ飛ばしてあげる」

そう言って笑った委員長がマジで頼もしく見えた。

「関係無くないし。俺は5組の奴に嫌われてるんだよ」

「は、何で？」

「いつまで経っても倉田さんが石原に返事をしないから、倉田さん

と仲がいい俺が倉田さんを盗ったんだってさ」

「はあ？何それアホくさい」

「確かにアホくさいけど、実際陰口言われりや頭にくるよ。倉田さんはいつまで経っても返事しないしさ」

「……それは」

「それはじゃないだろ。倉田さんがつきりさせないのが悪いんだろ？迷惑なんだよ」

悪い事って続くんだな。本当にそう思った。

委員長と別れて、色々考えながら帰っていると、目の前に一之瀬の姿を見つけて話しかけた。

でも一之瀬は何だか機嫌が悪くて、石原の返事を早くしろって言われたから少し頭にきた。

あたしだって悩んでるのに何で一之瀬にこんなに嫌味っぽく言われなきゃならないんだろう。そう思っていていつもの癖で言い返してしまつたら、一之瀬も言い返してきた。

そして最後には迷惑って言われた。一之瀬はそのまま自転車をこいであたしの前からいなくなってしまった。

残されたあたしはその場に立ち尽くしたまま。

やばい、変な人じゃんこれ。早く帰らなきゃ。

そう思っても足が縫いつけられた様になつて思うように歩けない。

お願い、早く歩いて。だってあたし今……凄く酷い顔してると思う。だってこんなに胸が痛くなったのなんていつ振りだろう。

とにかく早く帰らなきゃ、この顔じゃ外歩けない。

頑張つて家に帰って自分の部屋に入った途端、力が抜けて尻もちをついた。

息をするのも苦しくて、目の前がチカチカして、胸がズキズキ痛ん

で、顔に熱が集中して……ああこの現象を知ってる。
何度も経験してきた現象、それが今起ころうとしている。
耐えようと思っても耐えられない胸の痛みに目から水滴が落ちれば、
もう耐えられなかった。

「う、うう……うえええええ！」

そのまま声を上げて泣いたら余計に涙は止まらなくなった。
なんであたしが嫌われなきゃいけないんだろう、ああ一之瀬はもう
あたしに愛想を尽かしたんだ。

それが悲しい、もう話せないんだと思ったら悲しい。

なんでだろう。今まで嫌われる事なんて何度もあったのに、なんで
こんなに胸が痛いのか。石原に嫌われたらこんなに泣くほど悲しい
のか……

それを考えたら何で悲しいのかなんて理由はすぐに分かった。

惹かれてた。一之瀬に間違いなく惹かれてた。

話を聞いてくれる時の表情が好きだった。母親を心配する目の優し
さが好きだった。話しかけて振り向いてくれた時の笑顔が好きだっ
た。

でも気付きのが遅すぎた。もう一之瀬はあたしの事を嫌ってる。
全部自分が招いた事だ。一之瀬にも石原にも迷惑をかけてしまった。
嫌われて当然だ、なのに……何でこんなに悲しいんだろう。

「うえ……ごめん、ごめんなさい……」

それはどっちに謝ってるんだろう、でも声に出さずにはいられな
かった。

好きになってしまっでごめんなさい。振ってしまっでごめんなさい。

返事をしなくてごめんなさい。

友達でいてほしい、嫌われたくない。好きでいてほしい。
お願いだから、もう一度あたしに振り返って笑ってよ。

分かってるよ、全部私が悪いって。

でもどこかでまだ貴方が笑いかけてくれるって期待してる。

8 彼の答え

もう決めた。一之瀬に怒られて全部分かった。

あたしは彼に惹かれてた。あたしの事を理解して、それでもあたしの事を優先してくれる彼にどうしようもなく惹かれてた。

もしかしたら石原も、あたしの精神疾患の話を聞いても見捨てないかもしれない。

でもそれでも手を差し伸べてくれた、あの人がどうしても欲しい。きっとこれが最後の恋愛になったとしても欲しかった。

8 彼の答え

「やっぱ駄目、だったんだよね……」

そう言っただけで悲しそうに顔を伏せた石原に胸が痛んだ。

次の日、学校に言ったあたしは机に鞆を置いてすぐ、石原に声をかけた。

あたしから声をかける事なんて滅多に無かったから、石原は顔を赤くして驚いていた。そしてそれが申し訳なかった。

自分から話しかけるのに、それが振る時だなんて。

石原を呼び出して人の少ない所で返事をした。貴方とは付き合えないって。

石原は傷ついた表情を浮かべながらも、どこかしら諦めたような表情をしていた。もしかしたらもう分かったのかもしれない。

ズルズル返事を長引かせてたあたしに、なんて言っただけ振るんだろうって考えてると思われてたのかもしれない。

改めて自分の石原にしてしまった行いの最低さを身に持って実感し

た。

頭を下げたら謝らなくていいって言われて顔を上げた先には、やはり悲しそうな石原の姿があった。

「最後に教えてくんね？」

「何を？」

「俺が駄目な理由。ただ単に俺がタイプじゃなかった？それとも他に好きな奴いる？」

石原は多分気付いてる。だから聞いてきたんだろう。そしてそれを聞いて完全にあたしを諦める。

石原に酷い事をした分、正直に答えたい。

「……好きな人がいる。どうしてもその人意外は考えられない」

「そっか……頑張つて。応援するよ」

そう言つて笑つた石原はやっぱり一般の類で言われる格好いいの分類に入る。

しかもこんな性格のいい人に好かれて、あたしは幸せ者すぎる。こんなに性格ひん曲がつてるのに……

そのまま踵を返して歩いていく石原を見ていれば振りかえつて声をかけられた。

「帰んねえの？授業始まるよ」

「……一緒に帰ったら迷惑だから」

「何だよ今更。友達なんだから気にする事ねえって」

……あんたどこまでいい人？あたしを友達って言ってくれんの？
なんだか泣きそうになった顔を見られなくて、あたしはただ黙つて石原の元に足を動かした。

2人で一緒に教室に戻って、そのまま授業を受ける。でも全然集中できなくて、意識は一之瀬に向かうばかり。

やっぱり今日中に何とかしなきゃいけない。

そう思ったあたしは授業中にもかかわらず、こっそりメールを打って一之瀬に送信した。

どうか一之瀬がケータイをマナーにし忘れていませんように。没収されたら申し訳なさすぎる！

でも10分後に返信が帰ってきて、それが杞憂に終わったことに安心した。

“ いいよ ”

短いメールに少しだけ怖くなったけど、でも今日全部決着をつけたいんだ。

早く放課後になればいい。いや、ならないでほしい。

矛盾した気持ちを持ちながら、あたしはただただ授業の内容をノートに書き込んだ。

やっとHRが終わった。何で今日に限ってあの先生は話が長いんだろう。

急いで一之瀬のクラスにいかないと。下手したらかなり待ってるかもしれない。

教室を出る前に石原の方をちらっと見たら、石原はクラスメイト達と笑いながら会話をしていた。その姿を見て、少しだけ安心した。

急いで一之瀬のクラスに行ったけど、案の定早くHRが終わっていたらしくて、教室には一之瀬しか残って無かった。

自分の席で無表情でケータイをいじる一之瀬は、どこか機嫌が悪い

ように感じた。

それに少し怯えながらも、勇気を出して、あたしはクラスの扉に手をかけた。

「……ごめん、遅くなって」

「あ、いや平気だけど」

あたしが話しかけたら一之瀬は視線を向けてケータイを閉じた。いつもなら一之瀬が何か話を振ってくれるのに、何も喋ってくれない。痛いぐらいの沈黙が襲いかかる。

でもあたしから呼び出した。あたしが話さないといけないんだ。あたしは思い切って、石原を振った事を一之瀬に打ち明けた。

「さつき、さ……石原に返事してきたんだよね」

「へえ……そう」

一之瀬の無愛想な声が怖くて、少しでも肩がはねた。一之瀬は間違はなく今の状況を快く思っていない。

そうだ、だって一之瀬は昨日あたしに怒ってきたから。

迷惑な奴に今更話しかけられたくないだろう。でも聞いて、少しでもいいから。

「あ、あのさ、結局付き合わなかったんだ。友達としてはいい奴だけど、恋愛的にはやっぱり好きになれなくてさ……」

「え？」

今度の反応は違った。完全に驚いた反応だった。

これで1つ目の報告はできた。後もう1つの報告……あたしを嫌わないで。そう言いたいのに上手く言いだせない。

顔に熱が集まっていて、自分でも恥ずかしいくらい真っ赤になっ

てると思う。でも目だけは逸らしたくなかったから、一之瀬の目を見つめた。

一之瀬がどんな表情をしてるかは逆光で良く見えない。でも顔の角度からして逸らしてないって事は分かる。あたしはそのままボソボソと語りかけた。

「今更言える立場じゃないけど、さ……石原は多分もう一之瀬にキレたりしないと思うからさ、もう怒らないでよ」

「……」

お願い、何か言つてよ。無言とかがあり得ないんだけど。

何か言つてくれないと……あたし……

「こ、今度はちゃんとハッキリするから怒らないでよお……」

その言葉と共に零れたのは涙。みつともないくらい声が情けないものに変わっていき、代わりに出てきたのは嗚咽だけ。

でもその時、黙って座っていた一之瀬が急に立ち上がった。

驚いて固まってしまったあたしに一之瀬はガバツと勢い良く頭を下げてくる。

「ごめん！そんなんじゃない……なくて……俺も調子に乗ってたんだ」

「一之瀬？」

何言つてんの？調子に乗ってたのはあたしで、一之瀬は被害者なのに。

一之瀬が謝る事なんて1つもないのに……

「倉田さんが話しかける男子は俺しかいないって調子乗ってた。自

分が特別なんだって優越感に浸ってた。だから石原と仲良くなった
倉田さんに苛々した」

「……」

「ごめん、俺最低だよ」

最低じゃないよ。その言葉だけで、あたしは期待してしまったから。
まだ自分は特別なんだって思ってしまったいそうだから。

無意識のうちに首を振り、一之瀬の行った事を否定する。

一之瀬が顔を上げて、今度こそハッキリ目が合った感覚がした。ま
た泣きそうになって、鼻をすすりながら、思った事を口にした。

「あ、あたし初めてだったよ。家族以外にキレられて悲しくなった
の……」

「うん……」

「でも悪いのはあたしで、一之瀬はもうあたしの事嫌いになったん
だなって思ってた……」

その言葉が言い終わる前に視界が一之瀬の髪の毛しか見えなくなっ
た。

ぎゅぎゅうに抱きしめられて、一之瀬はあたしの肩に頭を埋めて
いる。今の状況を冷静になって考えた途端、一気に顔が赤くなって
固まってしまったけど、どうにか体を動かして一之瀬の顔を見つめ
た。

一之瀬は辛そうな、泣きそうな顔をしてる。

「ごめん倉田さん、俺まだ倉田さんの事好きだ。嫌なら突き飛ばし
てくれればいい。ごめん、友達って言ったのに結局俺はこんな奴
だったんだよ」

嫌だなんて一言も言っていない。そんな事思っはうがな。

嬉しすぎて何も言えなかった。今の顔を見られるのが恥ずかしくて、一之瀬の肩に頭を埋めて、図々しいかな？って思いながらも背中を手をまわした。

男の子ってこんなに大きいんだな。抱きしめられたのなんて初めてだから知らなかった。

一之瀬の心臓もあたしの心臓も破裂しそうなくらい動いてる。もういつそのまま破裂したら、きつと幸せにあたしは死ねる気がする。でも今死んでる場合じゃない。死ぬほど嬉しいこの状況を逃すほど、あたしは馬鹿じゃない。

「い、一之瀬がいつて言うなら、あたしと……っ、付き合って下さ……い」

情けないくらい掠れた声が教室内に響いて、恥ずかしすぎて死にたくなった。

でもその直後、更に強い力で抱きしめられて、小さく「お願いします」って聞こえた。

その後、一之瀬の小さな笑い声が聞こえて、夢じゃないんだって実感して、嬉しくてあたしも笑った。

生を受けてから、ずっと……ずっと恋愛に憧れてた。

きつと今なら嬉しさだけで死ねる。そう思った。

9 少しは恋人らしく

「そっか、あいつと付き合うことになったのか」

「うん……」

報告したあたしに対する石原の態度はやっぱり優しくて温かいものだった。

その優しさに甘え続けてた自分に罪悪感が再びのしかかった。

9 少しは恋人らしく

「おはよ」

「あ、おはよう」

次の日、登校してる途中に藤田さんに声をかけられて一緒に登校することになった。

藤田さんと軽い会話をしながら登校していると前方に一之瀬の姿を発見した。

声をかけるのには少し遠い距離だったので、あたしはそのまま藤田さんに視線を戻そうとした時、石原が一之瀬に手を上げて挨拶をしているのが見えた。

一之瀬は驚きながらもすぐに嬉しそうな表情に変わっている。本当にどこまでいい奴なんだよ石原は。

一之瀬と付き合いだしたと言っても全く実感がわかない。でも気持ちは跳ねてドキドキしてるのは感じる。でもそれは不快なわけじゃなくて心地いいものだった。

そのまま教室について藤田さんと別れて自分の席に着く。

今日一之瀬を誘って一緒に帰ろうかな？付き合ってるんだから何も可笑しい事はないんだし。

そう思ってるけど、改めて言うのも何だか気恥しい。

結局メールを送ったのは2限が終わった後だった。

“全然いいよ！HR終わったら迎え行く！”

すぐに帰ってきた返事に少し笑ってしまった。

でも断られなくて良かった。これからはこうやって誘っていいんだ、そう思える事が嬉しかった。

なのに……

「なんかニヤニヤしててキモい」

「……相変わらず容赦ないね倉田さん」

あたしの好きになった一之瀬はこんなキモい顔をしてただろうか？
頬をだらしなくさけて口は情けなく開きっぱなしだ。ニコニコ笑い
続けてる一之瀬にキモさを通り越して逆に恐怖が湧いてきた。

あたしの言葉を聞いてもニヤニヤさせてる一之瀬を置いて先に歩けば慌てて追いかけてくる。

そのまま隣に並んでも情けない顔はそのまま。

「……なんでさっきからそんな顔なの？」

「え、これは地顔なんですけど」

「そんなキモくなかった」

「……俺1日にこんなにキモいキモい言われたの初めてだよ」

ごめんね、でもキモいものはキモいだから仕方ないじゃない。
格好いいとか嘘を付ける顔じゃないのは確かなんだから。

あたしの一言に今度は表情を青くさせている。分かりやすい一之瀬の態度に笑いそうになった。

そのまま何気ない会話をして帰るのが楽しい。これが恋人なのかな？でも話してる内容は全く変わらない、でもこんなにも気分が高揚してる。

そのまま歩いていっていると、交差点に出た。いつもならここを左に曲がるけど、今日はまっすぐ。

一之瀬と同じ方向に歩いたあたしに一之瀬は首をかしげている。

「あれ？倉田さん曲がんねえの？家あっちじゃない？」

「今日は病院に行く日なの。何しても変わんないのに」

一之瀬はそれ以上何も聞いてこない。適当に相槌をしてすぐに話題を変えた。

本当にどこまで気がきくんだろうか。

そう言う所がありがたくて嬉しいんだよな。言ってやる気もないんだけどね。

そのまま他愛ない話をしていると、目の前をセーラー服と学ランの夏服を着ている高校生が歩いてきた。

頂垂れている男子を女子が励ましている感じだった。

「あーもう駄目だ。もう俺死ぬ。勉強に稽古に両立できるわけが無い」

「拓也諦めないでよー。1とか取ったら夏休み補修だよ」

「澪はいいよ頭いいんだから。もう俺本格的に喋ってる間にも眠気が……」

「寝るなら家でね。こんなところで寝たら拓也見捨てて帰るから」

「……夏なのに心が寒い。澪も冷たい……」

会話事態に大して興味はなかったから余り聞いてはいなかったけど、

一之瀬がなぜか2人を凝視している。

あの2人はそんなに面白い会話でもしてたのだろうか。見た目は普通の高校生だけ。

一之瀬があのだ2人に何を考えているのか大して興味もなく、そのまま前を向いて歩いていると、不意に一之瀬がポツリと呟いた。

「幸か」

「は？」

今あたしの名前を呼んだ？

間抜けな返事が出て、あたしの声を聞いて一之瀬がいきなり慌てた。

でもそれを見て何となくわかった。一之瀬がなんであのだ2人を凝視してたのかを。

なるほどねえ、ハッキリ言えはいいいじゃない。

「一之瀬の名前って何だっけ？」

「え」

「知らないんだよね。一之瀬の下の名前」

「そ、そんな……告る際にちゃんと名乗っただろお」

「そんな時は一之瀬の事どうでも良かったからさ、どうでもいい事なんて覚えるわけ無いじゃん」

一之瀬に暗い影が見え始めて慌てて口を閉じたけどもう遅い。

完全に一之瀬はいじけてしまってる。流石にこれは酷過ぎだな。

でも知らないのは知らなかったの。しょうがないの、いいじゃない。これからはずっとその名前で呼び続けるんだから。

「春哉、一之瀬春哉」

春哉、一之瀬春哉。それが一之瀬の名前。
春哉とか中々格好いい名前じゃない。一之瀬にはもったいないよ。
でもまあ名前を呼ぶんなら格好いい名前の方がいいから許してあげる。

でも中々名前を呼ぶ機会もなく、何気ない会話をしている内に病院
に向かう曲がり角に到着した。

この先を曲がれば病院だ。一之瀬ともここで別れ。

「倉田さんあっちだろ。じゃあまた明日な」

一之瀬はそう言って自転車を向かう方向に向ける。いつもならその
ままあたしもばいばいって言って別れるんだけど今日は違う。
まだ言ってないんだよね、あんたも言ってほしいんでしょ？

「そうだね、じゃあね春哉。また明日」

そう言った瞬間、春哉の目が点になる。

その間抜けすぎる顔に吹き出して笑ってしまった。

「呼んで欲しかったんじゃないの？急に人の名前呼んできてさ」

「え、いや、そのおー……」

「正直に言いなよ」

「……その通りです」

意外とあっさり認めたな。まあ人間素直なのが一番。

小さく縮こまってしまった春哉が何だか可愛くて笑っていたら、春
哉がガバツと顔を上げた。

何か言いたそうにしてるけど、何を言いたいかは大体分かる。

「倉田さ……」

「幸」

「え？」

「あたしの名前。知ってるじゃん」

嬉しそうにした後、急に緊張した面持ちになる。

そんなに緊張するものなのかな？名前なんて家族に呼ばれるじゃない。

一之瀬は気まずそうに、でも嬉しそうに笑ってあたしの名前を呼んだ。

「さ、幸。また明日」

「はい、また明日春哉」

一之瀬は顔を赤くして帰ろうとしたけど、そんな顔じゃ帰れないでしょう？

少し青ざめさせてあげようか。

「あ、そうそう。あんま他人を凝視しないほうがいいよ。変態みたいだから」

「へ？」

「随分羨ましそうにしてたけど」

「あのー倉田さん」

「幸つつつてんじゃん。あたしは何も知らないよ。春哉が桜ヶ丘の生徒をすごい羨ましそうな目で見てたなんてね」

一之瀬の顔が真っ青になって行くのを視界に入れながら病院に向かった。

しばらくして振りかえるとそこには一之瀬の姿はなかった。

一之瀬、違う。春哉。春哉。春哉。春哉……

「春哉……」

改めて呼ぶと恥ずかしくて、でも心が温かくなった。
今日の事も先生に報告しよう。嬉しい事があつたんだよって。

他人の名前を呼ぶのに緊張するのは貴方だけ。
わかる？それだけ特別なんだって事が。

10 彼女としての初デビュー

「幸！今日は俺のバイト先を紹介するぜ！」

「はぁ？」

10 彼女としての初デビュー

春哉がいきなりなんの脈絡もなく言ってきたもんだから、ついいいじっていたケータイを落としてしまった。

それを春哉がすごい反射神経で地面に落ちる前にキャッチして笑って返してきて、それを受け取りながらも驚きはまだ隠せなかった。紹介する？バイト先を？なんで？

春哉のバイト先って結構お客の多いラーメン屋だったはず。春哉と付き合う前だけど、あたしも1〜2回行ったことあるから場所もわかるし、今更紹介するような場所でも……

まさか春哉が言っている意味は……

1つの結論にたどりついて、顔に熱が集まってくる。

それを悟られないようにしたつもりだけど、自分でも呆れるくらい声がもつてた。

「え、な、何で？何であたしが春哉のバイト先に？」

「先輩が幸を見たいってうるさくてさあ、プリクラ見たら」

プリクラってまさか……やっぱりあたしの思った通りだった！

春哉はあたしをバイト先の人に紹介するつもりだ！

「何で見せんの！？春哉馬鹿じゃないの！？やだ！絶対行かない！」

ハズすぎ!!」

「そ、そこまで言わなくても……いいじゃん!俺だって彼女誰かに紹介してえよ!」

やっぱりそうじゃない!そんなのハズイに決まってるじゃん!

そう言いたいの、春哉の紹介したいって言葉に少しだけ嬉しさがこみあげてしまって上手く言葉にできない。

口をパクパク金魚みたいにしてるあたしに、春哉は少しだけ困ったような顔をした。

「無理しなくていいよ。先輩には言っとくし、急にゴメン」

あ、え?

いきなりそう言われたら罪悪感が募る。春哉はあたしを彼女って紹介したいだけじゃない。

そうだよ、学校の人じゃないんだし……あたしだって、その、公に春哉の彼女ってアピールしたい!

「行ける」

「へ?」

「春哉の彼女としてじゃなくてラーメン食べるだけなんだから。奢ってね」

「お、おう!奢ってやる!トッピングにチャーシューつけてやる!」

「あたしチャーシュー麺だから卵トッピングで」

「あ、そう……」

照れくさくてそっぽを向いたあたしの耳に春哉の嬉しそうな声が聞こえる。

一緒にラーメン屋行くだけなのに、こんなに喜んでもらえたらあだしだって嬉しい。

春哉は学校終わったら一緒に行こう！って意気込んで教室に戻っていった。

あたしもその後について教室に戻って、今か今かと学校が終わるのを待ちわびた。

「ここが俺のバイト先！さあ席についてついて！」

連れてこられたあたしはカウンターの席に座らされた。

春哉は着替えてくるって行って奥の部屋に引っ込んでしまい、何もすることのないあたしはケータイをいじりながらもメニューを見た。なんだ、紹介するって言っても別に普通にラーメン食べてればいいみたい。メニューを聞いてきた人に答えると、その人もすぐひっこんでしまったし。

面と向かって彼女です！って言うのかと思ってたから少し拍子抜け。でもバイト先の先輩らしき人があたしを見て、他のバイトの人に話しかけている。なんかやつぱり少しだけ気まずい。

春哉がバイトの服って言っても黒いＴシャツだけど、それを来て厨房に入っていくと、すかさず１人の先輩っぽい人が春哉にちよっかいを出しだした。

それに女の人と男のひと、なぜかおじさんまでが混ざっている。へえ……春哉っていじられ系な訳か。でも和気あいあいとしてて楽しそうじゃない。

店内はこんな時間だから結構人が多い。まあサラリーマンが多いみたいけど。

その時、店内のドアが開いて、３人の高校生が入ってきた。

うち２人を見た事がある。あの子たちって確か会った事あるよね。コンビニで。

短髪のスポーツバッグ背負ってた子があたしに気付いて、もう片方の子の肩を叩いている。

「なんだよ中谷」

「広瀬、あの人さー広瀬が体当たりしちやった人じゃない？」

「体当たり!？」

「人聞き悪い言い方すんじゃないよ！拓也も信じんなよ！でも確かにあの人だ。あの人可愛いよなー」

「お、何ですか？恋が始まりましたか？」

「うわー中谷うざー」

「なんでだよ！」

やっぱあの子はムードメーカーみたいだ。でも楽しそう。

あの時は2人しか見なかったけど、いつも3人でいるんだね。3人の高校生は騒ぎながらもすごく楽しそうだ。

その3人を見ると、春哉の先輩があたしに声をかけてきた。

「春どう？あいつちゃんと彼氏やってる？」

いきなり聞かれて少し焦ってしまった。

厨房の方を覗いてみると、騒いでる春哉と茶化してるバイトの人たち。

あーあ……春哉がそんなだから、あたしまで茶化されんじゃないの？

「春？春哉の事ですか？どうですかねえ、春哉はヘタレですから」

「あはは！確かに」

確かにって事は春哉はどこにいてもヘタレなんだなあ。それもそれで情けないけど。

春哉の方をチラって見たら、春哉をおじさんと大学生くらいの男の人が抑え込んでいた。

ていうか仕事しなくていいのかな。

そんな事を考えていると、春哉がラーメンを持ってあたしの所に小走りでやってきた。

その様子を確認した先輩は春哉の肩を叩いて厨房に戻っていく。

春哉はなぜか少し息を切らしながら、あたしの前にラーメンを出してきた。

「はい、お待ちどうさん」

「マジ遅い。ってか卵ついてない」

「あ、ごめん」

「春哉、あたしが客だからって気い抜いてんでしょ。ムカつくから店のアンケートに名指しで悪口書いてやる」

「止めてそれ！店長にマジで怒られるから！」

本気で嫌そうだし可哀想だから、それは止めてあげよう。

春哉は慌ててラーメンを持って行って、新しいラーメンに卵を入れるようにしている。

それに必要ないからそのままでもいいと言えば、少しだけ安心したように卵を入れて再び器を持ってきた。

困ったように笑って差し出されたそれを食べると、やっぱり美味しかった。

春哉は他のお客にも出さなきゃいけないから、厨房の方に戻っていつて色々作業している。

そのままズルズル食べていけば、あたしが食べるのが遅いのか、お客は少しずつ少なくなっていくた。

時間を見つけた春哉があたしの隣の椅子に腰かけて話しかけてきた。

「ラーメンどう？」

「美味しい。先輩作るのうまいね」

「いや、それ俺が作ったのもある。トッピングの卵は俺製」

「……さっきから可笑しい味があると思ってたら卵か」

「おい！」

春哉は見事に突っ込んだ後、少し気まずそうにして、あたしに振り返った。

「幸さー、優太さんに愛想良すぎじゃね？」

「はあ？あたしが愛想悪かったらあんたが気まずいじゃん。空気読んであげたんだよ」

「幸ありえねー！ツンツンすぎる！少しはデレを見せてくれ！」

「はあ？」

急に春哉がわめきだしたから、目が丸くなってしまった。

声が結構大きかったから、周りの人もこっちに視線を向けてくるし、ハッキリ言って恥ずかしい。

何してんのこいつは。

でもそれと同時に何だか春哉が可愛く感じて笑った。

「すいませーん！ラーメン替え玉ー！」

「中谷お前よく食うなあ……」

その時、声が聞こえて振り返ると、3人組の高校生の1人が手を上げて大声で替え玉を注文している。

2人はそれに呆れてるけど、でもどこか楽しそうだ。

それにしてもあの子は本当に根っから元気な子なんだなあ……

体だけ向けて他人事のように眺めている春哉を蹴飛ばして早く行けと促せば、焦ったように立ち上がった。

「ほら春哉、早く行きなよ」

「どんだけツンツンなんすか！しかも俺だけ！」

「これは春哉専用。これも立派な特別扱いじゃない？」

「……つくそ〜！」

悔しそうな顔をしてオーダー表を持って立ち上がった春哉に告げれば顔を赤くして立ち去ってしまった。

春哉がオーダーを受けて厨房に向かえば、3人組のスポーツ少年がこつちをじつと見て声を出した。

「あの人、彼氏いるんだなあ〜残念だったな広瀬」

「何がだよ！お前マジ馬鹿じゃん！聞こえるから止めろって」

いやもう聞こえてますけど……でもあの子が言えば不思議と嫌な気分にはならなかった。

本当に不思議な子。

この席からは厨房で仕事してる春哉が良く見える。

それを見つめながらにやける口元を手で隠した。

仕方ないじゃない。

こつというのが初めてで心底舞い上がってるんだから。

11 おはよう。だけど起きないで

「でさーこないだ2人でデートしてて」

「えーマジでー!？」

目の前を歩く女子高生2人が楽しそうに話をしている。

デートをした事を嬉しそうに語っている方は、どうやら最近付き合
いだしたらしい。

顔を真つ赤にしながらも嬉しそうに語る様子は誰から見ても幸せそ
うで可愛らしかった。

11 おはよう。だけど起きないで

「でねーチューしちゃったー!」

「マジでー!？やったじゃあん!」

良くそんな事を大声で話せるな。

いや、恋バナをしてる様子は学校のクラスメイトの女子が話すよう
な感じだから、多分皆こうなんだ。

あたしは恥ずかしいし、そんな事を話す相手も正直いないから、そ
う思うだけであって、多分仲のいい友達がいたら、こんな風に彼氏
の事を聞きとして語るものなんだろうな。

キスをしたと話す女子高生を見て、不意に自分はどうなのかと思っ
た。

そう言えばあたしまだ春哉とキスしてないな。いや、したくない訳
じゃない。

もっと堂々と恋人らしくしたいっていつも思ってる。でもそれが出

来ないのも分かってる。

最近もう1人のあたしについて考えるようになった。

もう1人の倉田幸はどうしてるんだろうか。いや、あたしが分からなかったら誰も分からない。

この肉体は第1人格である倉田幸の物で、あたしが好き勝手に使っているのかと聞かれたら分からない。

前までそんな事、全然考えなかった。倉田幸は鬱陶しい対象だった。こいつのせいで、自分は普通じゃないと思えるには十分すぎる素材だったから。

でも今は違う。その理由は分かっている。

先生に相談した時に、それは自分が今満たされてるからだと言われた。

確かにそうかもしれない。

母さんと最近いっぱい話す。学校の事、春哉の事、自分自身の事。

母さんはあたしの好物や好きなものを覚えてくれるようになった。ときどき作ってくれるようになった。

それがすごく嬉しかった。

2人でファッション雑誌を見て、今度一緒に買い物しようと言ってくれた。

楽しみでしよがなかった。デートでもないのに、どんな服を着ようか迷ったくらいだ。

学校では石原や藤田さんが話しかけてくれる。

石原は友達として本当にいい奴で、石原のおかげで藤田さんや石原の友達とも仲良くなった。

今度皆でラウンドワンに行こうと誘われて嬉しかった。少しずつ学校になじめてるって感じた。

そして春哉がいてくれるから。
家族でもないのに、家族のように優しく触れてくれて理解してくれる。

何事も優先させてくれる。怒らずに全部理解しようとしてくれる。
それが心地よくて安心できる。

全部春哉がいてくれたから。

今自分はすごく幸せだ。だからこそもう1人のあたしが気になるのだ、不幸な事しか体験せずに自らの殻に閉じこもってしまったもう1人のあたしを。

逃げた臆病者としか思えなかったけど、今なら励まして上げれる気がする。

真っすぐ歩きながらぼんやりと考えていると、不意に意識が遠ざかっていく感覚に陥った。

まただ、最近よくある。

頑張って真っすぐ歩こうと試みたけどできなかった。

恐怖が体をよぎり、そのままあたしは意識を手放した。

「っ……」

目が覚めた時に見えた物は見慣れた天井。ここはあたしの部屋だ。
待って、あたしはどうやって帰った？確かにあの時意識がなくなっ
て自分でもどうやって帰ったか分からない。

なのに今自分はここにいます。

なぜ？どうして？

この感覚に覚えがある。でもそれは認めるには怖くて、急に心細く
感じてきた。

お母さん……駄目、今は仕事 중이다。春哉も……今はバイトのはず。

石原や藤田さんには相談できない。
ぐるぐる回る頭で必死に考えた末、でてきたのは後藤先生だった。

電話をしたあたしに先生はすぐに来てもいいと言ってくれた。

でもやっぱり、他の患者さんも待つてるから、あたしは看護師の人になだめられて先生が来るのをひたすら待った。

15分後くらいに慌てた様子で先生がやってきた。

「ごめんね幸ちゃん。今なら予約の患者がいらないから少し時間とれる。待たせてごめん、怖かったね」

頭を撫でられてひどく安心した。今あたしは1人じゃない。

次に予約の患者が来るまで先生は話を聞いてくれる。だからあんまり時間はとれない。

ただどわづかな休憩時間に話を聞いてくれる先生はやっぱりとても優しい。

あたしは自分に起こったことをありのまま話した。記憶が飛ぶ事、今自分が幸せな事、そしてもう1人のあたしの事。

先生は親身になって話を聞いてくれたあと、肩に手を置いた。

「先生？」

「幸ちゃん、驚かないで聞いてね。それは多分、もう1人の幸ちゃんが目を覚ましてるのかもしれない」

「え……」

驚きはしたものの、やっぱりそうだったんだと言う気持ちの方が大きかった。

だってこの感覚は幼いころに散々会った感覚だから。もう1人のあ

たしが起きた合図。

「今はまだあまり表に出ないのかもしれない。でもわずかな時間表に出てる可能性が高い」

「な、何で急に……」

「それは多分幸ちゃんは今幸せだからだよ。幸ちゃんは前までもう1人の幸ちゃんなんて消えればいいって言っていた。それがもう1人の人格を縛り付けていた。だけど幸ちゃんは今、もう1人の幸ちゃんを心配できるほどの余裕を持てている。それがもう1人の幸ちゃんにとって、自分を認めてくれると言う事になるんだ。後は周りの環境だね。もう1人の幸ちゃんは今の環境なら幸せになれるって思ってるのかもしれない」

幸が目を覚ます……そうしたらあたしはどうなるの？

やっと手に入れたのに……やっと今幸せなのに。幸はあたしから奪う気なの！？

握り締めた手が痛くて涙が出そうだった。

そんなあたしの頭を先生はゆっくりなでた。

「大丈夫だ幸ちゃん。ゆっくり解決していこう。時間はあるんだ」

「もし幸が目を覚ましたらあたしは……」

「消えはしないよきつと。体を2人で共有することになるはずだ」

そんなの無理だよ。

そうなったら好きな時に母さんと出かけられない。石原達と話してきない。春哉と一緒にいられない。

いやだ、盗られるなんて絶対いやだ。

母さんや石原達もきつと盗られる。でも春哉だけは取られるのは耐えられない！

その時、看護師が予約の患者が来たと言いに来た。

先生は困っていたけど、明日来てくれと言って予約を取ってくれた。それに頭を下げて診察室を出たけど、心は完全に上の空だった。

“おはよう。” そう言ってあげたかった。

でもそれと同じくらいあんなに“おやすみ。” と言ってやりたい。

12 貴方の全ては手に入らないけれど

「あ、いやーさ……なあ、その……キスしていい？」

春哉に言われた言葉に頭が真っ白になった。

わかってるのだ、付き合つて1カ月経つてキスもしないのはおかしいって事くらい。

でも今のあたしには勇気がない。

12 貴方の全ては手に入らないけれど

慌ててはぐらかしたら1カ月は遅いんじゃないのかと突っ込まれて何も言い返せない。

言葉を探してうつむいているあたしに春哉がどんな顔をしているかは分からない。

言うのが怖い、でも言わなきゃ春哉はきっと自分が嫌われてるって勘違いしてしまう。そんなんじゃないのに……

言わなきゃ……言わなきゃ言わなきゃ言わなきゃ。

心の中で何回も呪文のように唱えて自分を奮い立たせて、顔を上げて春哉の顔を見つめる。

「幸？」

「駄目、この身体は倉田幸のだから駄目。幸はまだ起きてない。フーーストキスが知らない間に取られてたら悲しいじゃん」

あからさまに落胆した春哉の表情に胸が痛んだ。

やっぱり春哉はあたしなんかじゃ駄目なんじゃないだろうか。だって

て、普通だつたらキスもできない彼女なんて彼女じゃない。

春哉もあたしを見捨ててしまふんじゃないのか。

そう考えれば恐ろしくて、零れそうな涙を溢さないように必死だつた。でもその時、極めて明るい声を春哉が出してきた。

「まあしょうがねえか。行こうぜ幸、ラーメン奢つてやるよ」

春哉は優しい、こんな時も気を遣ってくれる。

でも分かつて。あたしだって春哉の事ちゃんと好きだから。

「春哉、ちゅーしょ」

そう言つて唇を窓に押し当てたあたしを見て、春哉は首をかしげた。廊下に立っている春哉と教室の中にいるあたし。窓を隔てたらキスできる。馬鹿馬鹿しいのは分かつてる。こんなのはただのおままとだつて事も分かつてる。

でもこんな事しかできないから……

春哉は苦笑いしながら、あたしの真似をしてくれた。やっぱり春哉は優しい。

こんなおままごとみたいな事で満足してるのはあたしだけ。だけどそれに付き合ってくれる。

ありがとう春哉、ごめんね。

あれから何度も記憶が飛ぶ時があつた。短い時は数分、長い時は数時間。

頻繁に起こる時には1日数回、でもない時は数日に1回程度の時もあつた。良く分からないけど怖くて怖くて、先生しか相談できなかった。

あれから春哉に特に変わった面は見られなかった。いつものように一緒に途中まで帰ろうと言ってきて、時間があつたら少し話して別れる。

その生ぬるい感覚に浸っている時間がすごく幸せで、春哉は自分を必要としてくれるのが分かった。

だから言うべきだと思った。自分の事を、他の誰でもない春哉に。お母さんには言えない。きつと表面では悲しんでくれるけど、それ以上に元の幸が戻る事を喜ぶはずだから。

でも春哉だけは……春哉だけはきつと悲しんでくれる。あたしを必要としてくれる。

春哉に話をするために、あたしは今日春哉のバイト先のラーメン屋に向かった。

バイト先の先輩たちはいい人たちだった。先輩達もあたしに慣れたのか、オーダーを聞きに来るついでに色々話しかけてくれた。

それに話をしながら春哉が来てくれるのを待つ。

そしてお客に春哉のラーメンを出した春哉があたしの所に歩いてきた。

「あと1時間いていい？一緒に帰ろうよ」

「え、いいけど」

「夜道は危ないからね、ボディーガード必要じゃん」

「あ……ですよねー」

こんな可愛くない事を言うあたしにも春哉は笑いかけてくれる。

それに素直に笑い返せないあたしは本当に可愛らしくない。

そのまま春哉をラーメン屋で待つ。

やっぱりここは人が多い。今の時間はサラリーマンが多いみたいだけど。まあここはラーメン美味しいし、バイトの人も愛想がいいし、値段も手ごろだしね。

ケータイをいじってるふりしてこっそりラーメンを作ってる春哉の写真を撮った。真剣そうな顔がカッコイイと思ったから。湯気が邪魔してはつきり映らなかったけど、春哉の真剣な表情はしっかり写っていた。

それを保存して春哉が終わるのをひたすら待つ。

いつの間にかうるさくなっていた心臓は普通に戻っていた。

暫くして春哉が制服に着替えて戻ってきた。

あたしはそれを確認してケータイを閉じる。ずっといじってたせいか、電池はもう1になっていた。

「お疲れ」

「ごめん、暇そうだったな」

「まあね。ケータイいじってたら電池無くなった」

春哉が笑って謝ってきて、それを受け流してラーメン代を支払って店を出た。

外は蒸し暑くて、入り口のドアを開けた瞬間、生ぬるい風があたし達を包み込む。

春哉はバイトの時に使ってたタオルを首に巻いてチャリを動かした。その後ろに座って、春哉の肩に手を置いた。

「春哉それおっさんみたい」

「うっせー。だって暑いんだよ」

最近の日課は春哉を家の近所まで送ってくれる事。2人乗りしてるのに自転車は中々スピードが速い。その間にぼつぼつ会話しながらも春哉の自転車をこぐスピードは変

わらない。

前2人乗りしてて警察に怒られた事もあったなあ。あの時は2人で笑ってしまった。怒られたねーって。

いつ言いだせばいいか分からなかったけど、早く言わなきゃいけないと思ったあたしは別れる交差点に向かう前に声を出した。

「春哉、今日このあと少し時間ある？」

「えー30分程度なら。一応21時には帰りたいからさ」

「じゃあ30分どうか寄ろうよ」

「どこに？」

「近くの公園」

春哉はいいよと言って、そっちの方面に自転車を動かした。

そうやって受け入れてくれる春哉が優しくて大好きで、肩に置いていた手を腰に持っていていき、抱きつくように腕を春哉の腰にまわした。結構力が強かったみたいで、春哉が笑いながら苦しいって言うてる。でも話してやらない。

「幸、くすぐってえって。もうちょい緩めてよ」

「ちよつとぐらい我慢しなよ」

はいはい。そう言って春哉が自転車を走らす。

そのまま黙ってたけど、不意に言いたくなつて再び春哉に声をかけた。

「春哉、ありがとね」

「んー？」

「あんたもあたしなんかじゃ不便じゃない？ままごとの様な恋人でさ」

「何だよ。そんなん思ってた事ねえよ」

「……そつか」

思った事ない？本当に？本当に思った事ない？
それを信じていい？その言葉だけであたしはすごく救われてるって
わかってる？

それぐらいきつとあたしは春哉に依存してる。それは言えないけど。
でも今度は春哉があたしに話しかけてきた。

「なあ幸」

「ん？」

「俺、少しは幸を満足させてる？」

「全然」

嘘、本当はあたしにはもったいないくらいの人って思ってる。

満足なんて言葉じゃ言い表せない。でもあたしは欲張りだからまだ
足りないの。

「春哉、ちよつとずつ近づいてね」

「は？何に？」

「あたしに。あたし以上にあたしの事理解して」

「……上等」

そう言つてのけた春哉に愛おしさがこみ上げる。

春哉なら本当にあたしの全てを理解してくれそう。そして受け止め
てくれそう。

だから春哉には全てを話せる気がする。

もうすぐ公園に辿り着く。公園の景色が見えてきて、自転車の速度
が落ちてくる。

再び心臓がざわめいたけど、大丈夫。春哉はきつと理解してくれる。

あたしの全てを理解して。

そんな人が1人でもいてくれたら、あたしはきっと生きていけるから。

13 内緒の話をしようか

春哉が自転車を置いて公園に到着する。あたしは礼を言っただけで空いていたブランコに座った。

錆びたブランコはぎい、ぎいと音を立てて今にも壊れそうだけど、壊れる事はなかった。

13 内緒の話をしようか

春哉も隣に腰掛けてブランコを緩く動かす。

高校生2人が講演でブランコとか滑稽だけど、今は笑える気分じゃない。

心臓が嫌なくらいバクバク動いて泣きたくなった。決意したはずなのにやっぱり伝えるのが怖いなんて。

何も言いたさないうあたしに春哉が話を切り出してくる事はない。

そのままお互い無言でブランコに座る。

途中で春哉のケータイのバイブがなったけど、春哉がケータイに出る事はなかった。

そのまま15分くらいが経過した。

そろそろ言いたさなければ、そう決意して漕いでいたブランコを止めて春哉を見つめる。

こっちに気付いた春哉をあたしに視線を向けてくれた。

街灯の光に照らされた春哉はハッキリ見えないけど、こっちに向けてる視線だけはちゃんと感じた。

また言いたす勇気がなくなつて、言いたす前から泣きそうになった。そんなあたしに春哉は何かを言いたそうな顔をしてる。

“ どうしたの？何かあったの？ ”

多分春哉はそう聞きたいんだ。でも聞いてきてくれない。

春哉も戸惑ってる。そんな春哉から話を振らせる訳にはいかない。

あたしの問題なんだから。

今度こそ決意を決めて声を出した。

声は自分が思っていた以上に震えていて情けなかった。

「あ の さ 春 哉」

「ん？」

春哉は聞く体制に入ってくれた。

体をこっちに向けて聞く姿勢を取り、優しい声に泣きそうになった。でもそれを隠すかのように軽く笑ってごまかした。心配掛けないように軽く言って終わりにしたいと思った。

「聞き流してくれてもいいんだけどさ。あんま真面目な顔されると困る」

「じゃあ幸が上手いこと冗談めかして言うことだな」

「あたしが口下手なの知ってるくせに性格悪いね」

意地悪だな春哉は。

でも茶化してくれた春哉に今度は本当に笑みがこぼれた。

いつだってそうだ、春哉はあたしをこうやって笑わせてくれる。落ち着かせてくれる。

そしていつまでも話を聞いてくれる。

30分程度なら公園によってもいいって言ってくれたけど30分はもう過ぎようとしている。

でも春哉はあたしを見捨てない。こうやって待ってくれる。これ以

上春哉の時間を奪ったらいけない、はやく切りだせ！！

「あたしが二重人格って前にも言ったよね。本当の最初に会った人格のほうの幸はずっと眠ってるって」

「うん、聞いた」

「最近ね、記憶が飛ぶんだ。本の一瞬なんだよ。1分、2分くらい、もっと短いかもしれない。1日に何回もあれば3日に1回しか来ない日もある」

「うん」

春哉はまだ何も言っていない。

だからあたしもみじめになるからゆっくり話したくなくて、早口で吐き捨てるように話した。

「なんだか良く分からなくて先生に相談したんだよね。あ、先生ってあなたのおばさんも通ってる精神内科のね」

「後藤先生だな」

「そう。でね、言われたんだあ」

“何を？”

そう期待される続きを促す言葉を春哉は言わなかった。

ただ驚いたように目を大きくして、固まってしまっている。多分春哉はもう理解してる。

察しいいから、でも万が一春哉の考えが間違っていない事を確認させるためにも、ちゃんと言葉であたしが言わなきゃいけない。

春哉ごめんね。でも言う事であたし自身もきつとすつきりすると思うから……

「先生がさ……言っただ。きつともう1人のあたし……本物の“

倉田幸”が目を覚まそうとしてるんだって」

そう言った瞬間、春哉の瞳が揺れたのが分かった。口元をあからさまに引きつらせて、かなり動揺してる。春哉はお母さんが精神病を患ってるから同じ精神疾患の人に対する対応は上手い。

でも今の春哉は対応が全くできない状態だった。そしてそれを見て嬉しく感じた。そんなに動揺するほど大切なんだと自惚れた。

「な、なんで……でもまだ仮定だよな！？決まった訳じゃ……っ！」
「そうだね仮定だね。でもきつと本当のことだよ。経験あるんだよね、記憶抜け落ちるのって。まだ幸が眠ってない時、無意識にあたし達の人格が入り混じってた時、気づいたら朝になってたとか夜になってたとか良くあったから」
「そんな……」

がつくりとうなだれた春哉。

悲しそうな声を出して、肩を震わせて……ありがとう、そんなに悲しんでくれるって思わなかった。

春哉の事だから毅然とした態度を取らなきゃって思ってるんだろっけど、あたしは逆に嬉しい。

そんな悲しんでくれるほどの存在だと確認できてうれしい。試すようでごめんね。でもそんな風でしか測れないの。

でも軽く言っただけでも他人に話せば現実を認めた事になる。心臓がズキズキ痛んで目頭が熱くなって、顔に熱が集中しだした。

その時、春哉が顔を上げた。まだ泣いてない、でも泣きそうな顔。

「そ、それってさ……幸のおばさん知ってたの？」

「知らない。まだ仮定だから期待させるのも可哀想じゃない。だか

ら先生と確信が持てるまでは秘密ってことにしてるの」

「いいのかよ……」

いいよ、だって母さんは幸に戻って欲しいんだから。

「いいよ別に。どうせ今言ったら母さんは病院に通えしか言っていないしね。だあれもあたしの事を必要としなくなる」

「幸……」

「あたしの存在なんか早く無くなれって言っただよ。遠まわしに病院に行けなんて言ってさ、参っちゃうよね」

そんな事は言われてないけど、卑屈な思考のおかげで孤立した気分になる。

幼いころ経験してきたトラウマと言ってもいいのかもしれない。それほどショックだった。

母さんに幸を返せと言われたことに。あたしの全人格を否定されたことに。

遂にこらえきれなくなった涙が頬を辛い、後続部隊がボロボロと目から溢れて行く。

その姿を見て春哉も最初はギョツとしてたけど、何でか春哉もつられて泣きだした。可笑しいじゃない、ここは慰めるもんじゃないの？

「は、春哉！？」

「泣けよ馬鹿！泣いちまえよ！辛いことがあったら泣くのがいいんだ！そうやって我慢して溜め込むから精神やられちまうんだよ！」

「っ！」

春哉のその言葉を聞いたら、もう耐える事なんてできなかった。

ブランコから飛び降りて春哉に飛び込んだ。春哉はしっかりとあたしを受け止めてくれた。

「消えたくないよ！消えたくないよお！まだ倉田幸として生きたい！春と一緒に居たいよお！！」

「俺だつて幸と一緒に居たいんだよ！倉田幸じゃなくてお前と一緒に居たいんだよお！」

死にたくない、あたしはまだ生きてたい。

まだやりたい事一杯ある。春哉としたい事もいっぱいある。

そして春哉の言葉が嬉しくて嬉しくて、余計に消えなくなっていく。この世界にまだ存在していきたい。

まだ春哉と一緒にいたい。

ここまで好きになったのに、ここまで生活が順調になってきたのに、なんで今それを幸に奪われなきゃいけないの！？

そんなのおかしい。あたしだつて幸せになる権利はあるはずなのに！幸はあたしが苦労して手に入れた物を目を覚ましてすぐに手に入れる。それが悔しい。

2人でわんわん泣き続けたら次第に涙も引つ込んでいった。

泣き疲れて、そのまま何も喋らずに春哉にしがみつく。この腕はあたしの物なのに、幸になんかに渡したくない。

春哉も大分落ち着いたのか、鼻を鳴らしてあたしに話しかけてきた。声は少し掠れてて、小さい声だったけど近くにいたあたしにははっきりと聞こえた。

「幸、約束しようぜ」

「……何を？」

「ずっと一緒にいるんだ。別れるとかマジあり得ないから。これから何十年もずっと」

「難しい事言うね。先の事なんてわかんない。春哉が浮気するかもよ」

「しねえよ。俺がしないからお前もするな。ずっと俺だけ見てろ」

春哉らしくないな、でもいいね。

ずっと春哉だけ見てれたらきつと幸せだ。あたしもずっと春哉だけを見ていたい。

そして春哉の話を聞いてテレビを思い出した。

「知ってる春哉、約束って言うのはその人の一部を縛るのと同じなんだよ。テレビで見た事ある」

「ふうん……」

「だから重たい約束は身体が塞がれたように苦しくなる。そしてそれが忘れられない」

言ってる意味分かるかな、これはあたしからのプロポーズだよ。

あたしを忘れないでって言うね。

体が塞がれた様に苦しくなれば、絶対に忘れないでしょ？ねえ春哉、あたしはその約束が欲しいよ。

そしてそれは春哉も同じだった。

「面白いなそれ。じゃあさっき行った俺の約束は絶対実行な」

「だから重いつて」

「それくらいがいいんだって。愛の試練だよ」

「あはは！馬鹿みたい。ばーか、春哉のばーか……」

内緒の話をしようか。

これで私達を邪魔できる人はいなくなる。

14 幸せな時間

「なあ幸、今週どつか出かけない？」

春哉からの正式なデートのお誘い。

その言葉だけで一瞬頭の中が真っ白になった。

14 幸せな時間

春哉とデート、デート、デート!?

ボンと赤くなつたあたしを春哉は一瞬にやっとした顔で見してきた。くそっ! こんな油断した顔を春哉に見られてしまった。でもそんな場合じゃない。

デート……本当にデートなんだよね。またラーメン屋によつて帰ろう話だよな? 朝から2人でどっかに行くんだよね?

こういうの経験した事がないからどう反応していいのか分からないけど、答えは決まつてる。断る理由なんてもちろんない。

「ど、どこでもいい?」

「どこでもいいよ」

春哉はあっさりとどこでも連れて行く宣言をした。

それならあたしが行きたい場所を選んでもいいんだよね。あたしは恋人とどうしても行ってみたい場所がある。その場所は簡単。

少しらしくないかもしれない。可愛げのないあたしには似合わない場所かもしれないけど、でもこんな的一生に一度の経験になるかもしれない。

恥も何も捨てなきゃ言えない。

「デイ、デイズニールンド……」
「ランド？」

聞き返した春哉に小さく頷くしかできなかった。

らしくなってるかもしれない。お前の柄じゃねえだろうって
思われてるかも……

でも春哉はあっさりそれを了承してくれた。

「いいよ、じゃあ１０時に東京駅な。そっから行こう」
「ん」

デイズニールンド……彼氏と行くのをずっと憧れてた。いや、行く
の自体憧れてたのかももしれない。

家族と仲の良くないあたしからすればデイズニールンドは聖地だ。

テレビでアナウンサーが家族が恋人、友達同士と着ている人にイン
タビューしてるのを見ながら、行きたいっていつも思ってた。

家族仲が悪い拳句に友達のいないあたしは一緒に言ってくれる人も
いないし、行きたいけど１人で行く勇気もなかったから、正直いま
で１回も言った事がなかった。

でもその夢がついに叶うのだ。大げさだけど、もう思い残すことは
ないかもしれない。

とりあえず早く起きなきゃ！化粧も服も頑張らなきゃ！

当日、遅刻しないためにも少し早めに出ることにした。でも早く着
き過ぎない程度にだけ。

張り切り過ぎてるって思われるのも格好悪いし、正直春哉がもう来

てくれてたらなつて言う期待も少しあった。

でも春哉はやっぱ期待を裏切らないね。

待ち合わせ時間の10分前に東京駅についたけど、春哉は既について待っていてくれた。

無表情で人ごみの中であたしを待つて春哉は惚気かもしれないが、格好良く見えた。

制服かラーメン屋の服しか来てるイメージがなかったし、私服を見た事があまりなかったからすごく新鮮だ。

春哉もこっちに気付いたのか視線を向けてきたので、声をかけようとしたけど何だかボケーとこっちを見てる。

何考えてるんだあいつ？なんか焦点なつてない気もするし……

「うあつ！」

「ぼけつとしてないで。何してんの？早く行こうよ」

案の定声をかければ、あからさまに春哉は驚いた。こっちに視線を向けてたと持ったのに、実際は何を見て何を感じてたんだろうか。

何だか少しムカついてさっさと先に歩いていけば、春哉が早足であたしを追いかけた。

そのまま切符を買ってホームに向かう。ホームの人の多さに少しびつくりしてしまった。この人たちみんな行くのかな？やっぱデイズニールンドって人気なんだな。

デイズニールンド駅で降りたあたしたちはランドに向かって歩く。シーに向かう人は更にモノレールみたいなものに乗るから違う方向に歩いていく。少し人数が少なくなっただけかな？

そして前方にはホテルと夢にまで見た本物のデイズニールンド！こんなに近かったんだ！初めて来たよデイズニールンドに！

はやる気持ちを抑えてフリーパスを買って中に入る。
そしたら入口の広場にはテレビに出ていたのとまったく同じのミッキーの姿があった。

「ミッキー！」

「あ、おい幸！」

春哉の制止も無視して走っていけば、ミッキーは写真撮影をしていた。

係員さんが並べば一緒に写真を取れますよって教えてくれて、あたしは早速並ぶ事にした。

後から切れた顔の春哉がやってきたけど、動く気のないあたしにも言う事なく一緒に並んでくれた。

炎天下の中で並ぶのはきついけど、これがレジャーランドの醍醐味だ。ミッキーと写真を取れるならあたしは頑張るよ。

そして35分くらい待ってやっとミッキーと写真を取れた。

肩をたたかれて握手して手を振ってくれる。ミッキーかわいすぎる！目的を1つ果たしたし、後は乗りたいアトラクションがいっぱいある！プーさんのハニーハントにパズライトイヤーにスプラッシュマウンテン、あとスペースマウンテンも乗りたい！

ミッキーたちの家にも行きたいし、ホーンテッドマンションにも行ってみたい。でもこれだけ人が多かったら全部は無理だろう。

早くファストパスを取らなきゃ！時間を1秒も無駄にはできないし！春哉はそんなあたしに文句1つ言わず付き合ってくれた。

「春哉！次行こう！」

スペースマウンテンとスプラッシュマウンテンのファストパスとって念願のハニーハントに乗れて、近くにあったからイツアスモールワールドにも乗れた。次はホーンテッドマンションだね！でも春哉は既にくたくたのようだ。少し早くない？

「幸、飯食おう。もうすぐ昼になるし」

「えーホーンテッドマンション行こうよ」

「今食つとかないと時間になったら人が多くて席取れなくなるよ。俺疲れたし……」

情けないなあ春哉は……仕方ないか付き合わせてるんだし、春哉の意見も聞いてあげなきゃね。
頷いたあたしに春哉はあからさまに安どの表情を浮かべた。
あんたどんだけ休みたかつたんだよ。

「どこで食いたい？」

「あんまりどこかでーって言うの無いから、歩きながら探そうよ」
「そうしょっか」

そう話しながら春哉の手を握った。今あたしの横を通り過ぎたカッブルが手をつないでたから。

春哉は案の定動揺したけど、あたしはあくまで平静を装った。

「なんで？彼女が彼氏の手を握ってもおかしい事ないじゃん」

「そ、そうだよな。そうだよな！」

そうだよ、あたしたちは恋人なんだから別にいいでしょ。

春哉は加減しないのか、力強くに行ってきたから文句をつけたけど、でもいいや。

暑い中お互いに手に汗をかいたけど、でも不思議と深いじゃなかった

た。

その後はイタリアンレストランでご飯を食べてホーンテッドマンションに乗ってまたバズライトイヤーのファストパスを取りに行った。時間的に最後のファストパスになってしまったけど、でもいいや。これだけ取れば十分だよな。

その後はファストパスを使ってアトラクションを乗り、いつの間にか辺りは薄暗くなり始めていた。

「春哉、エレクトリカルパレード見たい。席取ろう」

「え？その間にアトラクションのらねえの？待ち時間短くなるぞ」

「駄目、パレード見たい」

「そうなん？じゃあ少し早いけど席取る？」

「取る」

早めに席を取ったおかげで最前列を取れた。

時間が近づいてくるにつれて多くなる人。そしてスピーカーから声が聞こえてくる事には沢山の人が見るために待機していた。

そしてスピーカーから音楽が流れ出す。あの独特の音楽が。

まだライトアップされた物は来てないけど、あたしは興奮してジッと通路を眺める。

早く来ないかな？早く来ないかな？子供のように心の中で思いながら来るのを待った。

パレードは綺麗だった。

初めて見たけど、キラキラ光ってて楽しそうで、本当に綺麗だった。小さな子たちのはしゃぐ声が聞こえて、隣に座ってる家族も綺麗だねって話してる。

本当にすごい。今日来て良かった……

今日は幸が出てくることもなかったし、記憶が途切れることもなか

った。楽しかった、今までの人生で多分一番楽しかったんじゃないのかな？

その時、春哉があたしの手を握ってきた。

振り返ればライトに照らされた春哉が気まずそうにして笑っている。

「ほらさ、夏でも夜は冷え込むからさ」

「……馬鹿な冗談は言わない方がいいよ」

でも振りほどかないあたしも少し冷えたのかもしれない。

あーあ折角集中してみたのに集中できなくなっちゃったじゃん。

夏の暑さなんか感じない。手の方が何倍も暑く感じる。

今の自分の顔を見られなくてあたしは真っすぐパレードを見つめた。

最初で最後かもしれないじゃない。

でもこんな幸せな日を一生忘れたくない。

15 譲りたくなかなかったのに

「あの人が一之瀬君、優しい人だね」

「そうだね。あんたの彼氏だ」

「あたしのじゃなくて貴方の方でしょ？」

そうだ、あたしの彼氏だ。でももう違う。

あたしじゃなくて世間的にはあんたの彼氏になる。

15 譲りたくなかなかったのに

「すつごく楽しかったな！」

「良かったな」

そう言つて笑つてくれた春哉を見て幸せになる。

デイズ二ーも閉園の時間になつて、電車に乗る為に皆が駅に向かつていく。

それはあたし達も例外じゃなく、この満員の電車に乗らなければいけない。少し苦しいけど、でも今までの楽しさを考えたら全然苦じゃない。

デイズ二ーランドは楽しいところだった。綺麗な園内は夢のようだった。時間を忘れたかのように幸せで、一生ここから出たくないと言え思った。

もうすぐ夢が覚めて現実が始まる。もう永遠にあのまま夢のままできてくれたら幸せだったのに。

夜も遅かったからマックがどこかでご飯を食べて帰ろうと春哉が言ってくれた。それを聞いて安心した理由は分かっている。

良かった、まだ戻らなくていいんだ。もう少しだけこの幸せに浸っててもいいんだな。そう思えた。

春哉との他愛のない話は楽しかった。

電車から降りて駅の仲のマックでご飯を食べて少し話をする。

それだけの事なのに幸せで嬉しかった。

くだらない内容だったけど、春哉が話せば面白くて、あたしがくだらない内容を話しても春哉が笑って突っ込んでくれるから、それに對してあたしが笑った。

そのまま1時間程度話をして、春哉が帰ろうと促す。

あーあ夢の時間が終わっちゃった。

春哉の自転車の後ろに座る。もうここはあたしの特等席だ。

そして自転車をこぐ春哉と少しだけ会話をしながら帰った。もう少し

しゅっくり走ってもいいのに。早く家に着いちゃうじゃん。

そして自転車で20分程度走ったら見慣れた住宅街に着き、あたしの家の近くまで自転車は走ってきた。

いつもの曲がり道で春哉はあたしを降ろして「ゆっくり寝ろよ」と笑って自転車を再び漕ごうとした。

でも言いたい事があったあたしはそれを遮って、春哉の服の袖をつかんだ。

振りかえった春哉に言いたい事は沢山あったけど、一番言いたい事だけを口にした。

「春哉、ありがとう」

「俺こそめっちゃ楽しかった」

「あたし絶対に忘れないから。ありがとう」

本当に忘れない。こんな楽しい日を与えてくれてありがとう。

「幸、お帰りなさい」

「ただいま。今から準備するよ」

「幸、その事なんだけど……無理しなくていいのよ」

家に帰った母さんが心配そうな顔で出迎えてくれた。無理をしなくていいという言葉だけであたしがどのくらい救われてるのかを母さんは知らない。

母さんは今あたしを愛してくれてる。それが分かっただけで幸せだから別にいいの。

首を振って大丈夫、と笑ったあたしは部屋に戻り、荷物を整理した。

明日から病院に入院する。正確には幸を表に出すために。

今が一番の時期なんだとか、後藤先生の話で、母さんはそれに迷ったけどあたしが同意した。

この肉体を幸に返す時が来たようだ。どうせ1つの肉体に2つの人格があるのはあり得ない。片方は消えなくちゃいけない。

その時が来ただけ。

だから嬉しかった。春哉との時間が、最後になるかもしれないけど、あんな幸せな思い出は幸にはないはずだ。

これから作っていくのかもしれないけど、今はあたしの方が幸せだ。それだけを心の支えにあたしは消えていくから。だから大丈夫。

「幸ちゃん、こんにちは」

「こんにちは」

ご当選背から紹介を受けた大きい総合病院。

そこにあたしは入院することにした。あたしの診察をする時は寄進の知れた後藤先生がここまで来て診察してくれる。

でも本物の幸が現れてパニックを起こした時用に病院にいつもいてほしいから入院と言う形になった。

先生はにっこりと笑って、あたしのカルテをめくる。

横にはこの大病院の精神科医の女の先生も控えている。女の先生は気をほぐすために、あたしに他愛のない事を話しかけてくれた。

「幸ちゃん、今日は少しもう1人の幸ちゃんとお話ししてほしいんだ」

「はい」

「だからゆっくりでいい。もう1人の幸ちゃんに話しかけてくれないかな？」

そんなので幸が現れるかは分からない。

でも言われたとおりに目を閉じて真っ暗な世界にして幸に話しかける。しつこくしつこく。

そしてその時、頭の中にもう1人の声が聞こえた。

「幸ちゃん、怖いよ。どうしたの？」

もう1人のあたし。倉田幸。こいつはあたしに起こされて明らかに怯えている。

まだ外の世界が怖いんだ。

「もういい加減出てきなよ。何年間ひきこもるんだよ」

「だって……外の世界は怖い。それに幸ちゃんも出てきてほしくないでしょ？」

「周りがあんたを望んでる。あたしは関係ない」

「でも……」

「でもない！なんなんだよあんたは！望まれてる癖に！愛されてる癖に！あたしが必死になってやってきた物をあんたはただ表に出るだけで手に入れる！その何が不満なんだよ！！」

声を荒げたあたしに幸は酷く怯えた。

苛立っているのはあたしなんだ。そんな態度を取られたらますます苛立ってしまう。

幸は怖い怖いとぐずぐず泣き続け、あたしは幸が泣きやむのをただ待つしかない。

春哉は見捨てないといいな、こんな泣き虫だからウザがられるかも。でもあたしですら受け入れてくれたんだ。この幸の事だって大切にしてくれる。

胸に感じた痛みを取り除く方法は見つからないけど、でもこいつはそろそろ起きるべきなんだ。

「なあ幸、もう終わりにしようよ」

「何を？」

「かくれんぼ。あんたが怖がった父親はもうどこにもいない。あんたは自由なんだよ。母さんだってあんたが現れるのを望んでる。一体何が不満なんだ？」

「だって……ずっと出てないのに、いきなり出るなんて怖いよ」

「あたしをこの世界に勝手に作り上げて表に出して放置したくせに甘えてんじゃねえよ」

厳しい口調で言えばまた怯える。

同じ顔で止めてほしい。はつきり言って気味が悪いよ。でも許してあげる。

悲しくて苦しいけど全部譲ってあげる。あんたにあげるよ。友達も母さんも春哉も全部……

涙が頬を伝い、胸がキリキリと締め付けられた。

そんなあたしを見て、幸は驚いている。

「幸ちゃん……」

「もう駄目なんだよ。これ以上あたしに迷惑かけないでよ。いずれにしてもあんたにあたしは全てを譲らなきゃいけないんだ。これ以上大切な物はいらないよ」

⌈
⋮
⌋

幸があたしの涙を見て悲しそうに俯いて、でも何かを決意したかの
ように顔を上げた。

遅いよ馬鹿。でもそれで決意で来たのなら良かったのかもしれない。

立ちあがった幸にあたしは見送りの言葉を送った。

「じゃあね、暫くはここで見届けてあげる。心配がなくなったらあたしは消えるから」

「……あたしはやっぱり怖いよ」

そう言つて幸はあたしの前から姿を消した。どうやら本当に出て行つたみたいだ。

あーあ、暫くはここで1人かあ……1人は慣れてたはずなのに、今はどうしようもない辛いや。

誰か来てくれないかな。でももう新しい人格は勘弁だ。そう考えた
らやっぱ1人でここにいろしかない。

寂しい、寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい！！！！

消えるのは嫌だ！幸なんか死んでしまえばいいのに！！

そう考えてしまった自分が情けない。

結局あたしは何もかも失う運命だったのだ。ぐうの音も出ない。最後に楽しい思い出を手に入れたからよしとしよう。

でもこの止まらない胸の痛みとやるせない怒りはどうすればいい！？
これを暫く体感しなきゃいけないなんて死んでしまいそうだ。もう
早く消えたい。でも消える方法が分からない。
だって消えたくないんだから。

とりあえず心を鎮めるために目を閉じた。何も聞こえないように、
見えないように。眠ってしまおう。

「君が……幸ちゃんかな？」

「……………はい」

何も聞こえない。

必死にあがいてた糸があっさりと切れた。

そして私は消えていく。

16 例え手に入れたとしても

数年ぶりの外の世界は何もかもが変わってて、何もかもが恐ろしかった。

あたしを元の暗闇に戻してくれたらいいのに、もう1人のあたしはそれを許してくれない。

あたしの目の前には口元を手で押さえている少し老けてしまったお母さんと、幸が大好きな先生だった。

16 例え手に入れたとしても

「貴方、幸なの？」

「……お母さん、だよな？」

お母さんは嬉しそうだけど、どこか複雑そうな顔をした。

そうだよな、あたしなんかに戻って欲しくないよね。だってもう1人のあたしと過ごした時間の方がお母さんは長いもんね。

確か7歳だ。あたしがもう1人のあたしを作り出して中に閉じこもったのは。だからお母さんとは7歳までの記憶しかない。

いや、閉じこもる前からもう1人のあたしは存在してた。実質一緒に過ごした時間はもつと短かったはず。

そんな子を今更子供なんて可笑しいよね。

先生は少し驚いた顔をしたけど、すぐにいつもの優しい表情に戻った。

「こんにちは幸ちゃん。先生の事は知ってるかな？」

「……知って、ます。後藤先生」

「そうだね。これから幸ちゃんは少し病院に入院してリハビリして
いかなきゃいけないんだ。でもすぐに学校にも行けるようになるか
らね」

行きたくないよ。このまま寝かせておいてくれたら良かったのに。
幸は学校で上手くやってたから。今更あたしなんか出てきてもど
うしていいのかわからない。

あたしの記憶はもうずっと前で止まってしまってる。

そんなあたしが今更出てきた所で、どうやって生きて行けばいいん
だろう。勉強も分からない、他人と話すのも怖い。そんなに社会
になんて出て行けないよ。

それからしばらくリハビリを受けらせられて、あたしは10月の初
めに学校に行かなきゃいけなくなった。

勉強が分からないあたしに先生は障害者が集まる子供たちが勉強す
る場所を紹介してきたけど、正直自分が障害児だなんて思いたくな
かったからそれを拒否した。

あたしは障害児なの？そんな事急に言われても困るよ……

学校で一之瀬君を見かけたけど、話しかける事は出来なかった。だ
って幸の彼氏だから自分が声をかけるのは気が引けた。

でもあたしの事を知ってるのは学校では彼しかない。話しかけて
くれたらどんなに嬉しいかわからない。

でも今のあたしは確実に学校に馴染めてなかった。

「幸、学校はどう？」

「……どうにも」

お母さんが出されたご飯を黙々と食べる。それを少し残念そうにお母さんはしてたけど、反応はできない。

知ってる。このご飯は幸が好きだった奴だね。お母さんは何も考えてないんだろうな、あたしは別にこれが好きってわけじゃないのに。

味付けも甘い味付けから薄味に変わった。多分幸がうす味が好きだったからなんだな。あたしは甘い味付けが好きなのに。

部屋の中も幸が集めたグッズやら何やらで埋め尽くされてる。一之瀬君と撮ったプリクラ、クラスの友達と遊んでる写真、母さんと出かけた時に買ってもらった服。

違う違う違う。ここはあたしの部屋じゃない。あたしの場所じゃない。

どこもここも幸の残り香が多すぎる。家にも学校にも病院にも！結局あたしの居場所なんてどこにもないんじゃない！

あたしが所有してたものなんて1つもない。この部屋のどこにも！小学生の時に買った机は新しいものになっちゃってる。使ってた教科書もどこかに捨てられてる。小学校の卒業アルバムに映ってるのは、あたしじゃなくて幸だけ。

あたしが戻ってきた意味があるの？こんなのただの生き地獄だよ！

「幸……幸、出てきてよ」

お願い、あたしを元に戻して。暗い世界に戻して！

こんな世界でこれから生きるのなんて無理に決まってる。あたしには自信がない。

返事のない幸に苛立ちが募り、近くにあったクッションを投げ捨てた。クッションが壁にぶつかり床に落ちる。

あのクッションも幸の物。このベッドも幸の物。この枕も幸の物、毛布も布団も全部全部！！

じゃああたしは誰なの？貴方が幸なの？

ベッドで眠るのが怖くて、そのまま床にうずくまるように眠った。体が痛いとか考えなかった。今のこの状況の方が怖いから。

「よーっす倉田さん」

次の日、学校に行つて昼休みになれば、クラスの人が声をかけてきた。

名前はまだ覚えてない。でも幸と仲が良かった子だよ。その子はこのこにこ笑いながら、あたしに話題を提供してくる。

なんて返せばいい？なんて返せば差支えの無い会話になる？

何も返せないあたしに、その人はあたしの肩を軽くたたいて、笑っている。

「なんだよ倉田さん。そんなキャラじゃないだろ？そこでいつもの毒舌来てよ」

毒舌って何？何を言えばそうなるの？幸じゃないあたしが言ったら、貴方は怒るでしょ？

違う、あたしは幸じゃないの。貴方の知ってる幸なんかじゃないの。でもその子も段々反応を返さないあたしに笑みが消えて無表情になつていく。それを見るのが恐ろしくて顔を上げれない。

「いつもと違うな。つまんねえよー」

つまらない。その言葉が重くのしかかった。そうだ、あたしはつまらない人間なんだ。

話しかけてくれる人に相槌1つ打てないつまらない人間。こんなあたしに話しかけられる資格はない。

言い返せない、怖い。嫌われた。

でもあたしは幸じゃないから。それなのに幸の様に扱わないでよ！その時、頭上でその子が声を上げた。

「よお一之瀬、倉田さんに用か？でも今日の倉田さんは何にも反応してくれねえよ。お人形さんみてえ」

「お前だからじゃないのか？」

「なんだよそれー！」

一之瀬君？

急に腕を惹かれた事が怖くて直接目を見れない。でも一之瀬君だ。

一之瀬君はそのまま何も言わずにあたしを引つ張って教室を出た。

助けてくれた？それとも返事ぐらいしろよって怒る気にいるのかな……どちらにせよ怖い。逃げたい……

「あいつらも悪気はないんだ。怒らないでやってくれ」

屋上で話しかけられた声は思った以上に優しい物で、あたしを責める意思がないんだと確認したら少し力が抜けてしまった。

慌てて首を横に振って、あの人達に怒りは感じてないとアピールする。

一之瀬君は助けてくれたんだ……あんな中に入るのはすごく勇気があるはずなのに、幸の言ってた通り、一之瀬君は優しい人だ。思いきってお礼を言えば、一之瀬君は首を横に振った。

「あ、ありがとう。助けてくれて」

「別に礼言われる程じゃないよ」

「でも、嬉しかった、から……幸がね、言ってた。一之瀬君は優しい人だって」

言った後にしまったと思ったけど、一之瀬君の表情が変わらないから、もしかしたら平気なのかなと思った。

あたしは彼に幸の事を色々聞きたい。だってあたしは幸の様にならなきゃいけないから。

偽るのは不安だと言われれば嘘になる。でもそれを我慢しなくちゃいけないんだ。

こんな事をするくらいなら幸が出てきてくれればいいのに、幸はあたしの呼びかけに応えてくれない。意地悪だ。

あたしをこんな世界に1人放り捨てるなんて……

「ねえ、幸はどんな子だった？」

「え？」

「幸の真似、しなきゃって……だから幸の事、色々教えてほしくて」

一之瀬君が訳が分からないと言うように首をかしげた。理由はあまり言いたくないんだけど、一之瀬君は知りたがっている。

でも自分から言うのは気が引ける。そう思っていた矢先に一之瀬君が口を開いた。

「何で真似する必要があるの？」

「だって……皆、幸の事を聞いてくるから。あたし、話についていけなくて……」

それを言った瞬間、一之瀬君の表情が変わる。その顔はふざけた事をするな、と物語っていた。

ビックリして少し後ずさってしまったあたしに一之瀬君はくぎを刺

してきた。低い声で、怒鳴る訳じゃないけど威嚇するような。

「そう言つのやっけると自分が辛くなるよ。止めた方がいい」

「でも……」

「止めて。幸の真似されると頭にくる」

一之瀬君はあたしに気を遣ってる？それともあたしを嫌ってる？

でも幸の真似をしてほしくないって言われて怖くなった。そんなに悪い事が自分では分らないけど、怒られるくらい悪い事なんだ。小さな声でしか謝れない自分が腹立たしい。そんな事ばかりだと嫌われてしまうのに……

一之瀬君も慌てて謝ってきたけど、一之瀬君は悪くない。悪いのはあたしなんだ。

早く授業が始まって欲しい。今は気まずいよ……

結局何も変わらない。

肉体を手に入れても、私は何も手に入らないんだ。

17 理解者は現れない

他人は怖い。周りの視線が気になる。

放つといてほしい、暗闇に戻してほしい、幸と比べるくらいなら幸に話しかければいい。

だって貴方達の知ってる幸はあたしじゃない。

17 理解者は現れない

今日も石原君と藤田さんが挨拶してきた。

それに返事が出来なくて俯いていれば、そのまま一緒に投稿になっ
てしまう。それが怖くて更に口まで閉ざして会話に入らないように
すれば、自分たちは邪魔なのか？って聞かれる。

そう言う訳じゃない。あたしも普通にお話したい、けどその会話
に割り込む事が出来ないだけ。

口に出したくても出てこない。そのまま黙っていたら、2人は先に
行くね。と言って去っていつてしまう。

またやってしまった。今度こそ完全に嫌われた。

いや、嫌われた方が楽なんだ。だってあの人たちはもう1人の幸し
か知らないから、そんな人たちには嫌われた方が……

自分でそう言い聞かせてるけど、正直寂しいし苦しい。返事さえで
きたら嫌われないんだろうか。そう考えてしまう。

せめて相槌ぐらい打てればいいのに、でも打てないからあたしは今
1人にいる。自分の言いたい事を言えないから勘違いされて去られ
てしまう。

全部あたしが悪い。

朝から悲しくなってしまうたけど、お昼休み、屋上に逃げていたあたしの目の前に一之瀬君の姿を発見して、少しだけ心臓がはねた。一之瀬君は幸の彼氏で、あたしの事もちゃんと知ってて、この間は助けてくれた。優しい優しい幸の彼氏。

一之瀬君になら話しかけられるかもしれない。彼はあたしをちゃんと分かってくれてる。あたしが話しかけても返事を返してくれるはず。

自らの体に鞭を打ち、一之瀬君の側に向かう。

「お、おはよう」

「……おはよう」

一之瀬君はいきなり声をかけたあたしに驚いてたけど、ちゃんと返事を返してくれた。

良かった……無視されなかった。

一之瀬君は不思議な人。幸の彼氏だったから幸の事を理解してる。そしてあたしの存在を認めてくれる。幸と比較しない。

それは一之瀬君が敢えて口にしないだけかもしれないけど、それがどれだけ救いになってるか分からない。

一之瀬君になら頑張って話しかけようって思えてくる。

「き、昨日何してた？」

「ずっとバイトだったな」

ラーメン屋さんだよ。幸がいつも嬉しそうについていくのを見た。

幸が公に一之瀬君の彼女だって披露する唯一の場所。あそこで一之瀬君のバイトの先輩たちと話している幸は嬉しそうだった。

なんだか少しだけ悔しくて上手く笑い返せなかった。

そのまま会話がなくなってしまうって、気まずい雰囲気になる。何か話題を探さなきゃと思っっているあたしとは対照的に、一之瀬君は特に会話をしようとしている感じではない。

あたしとの会話、嫌なのかな……そう思ったら気分がどんどん下がって、逃げ出したくなる。

でも教室に逃げたらもつと悲しいのは分かっているから、足が縫い付けられた様に動けなくなった。

生徒も段々いなくなり、5限目の授業開始5分前のチャイムが鳴る。戻らなきゃ。そう思ったけど一之瀬君が動く気配はない。このままここにいるのかな。

「もどんないの？」

「う、うん。もう少しここにいたいな……駄目、かな」

「駄目じゃないけど」

もう少しここにいたい。初めてのサボリ言う行為に少しだけワクワクしてるあたしは小学生レベルだ。

こういうの1度もした事が無かったから新鮮だ。

なんだか会話をしなくても居心地は悪くなくて、あたしはそのまま空をボーッと見つめていた。

それから10分くらいして、何だか一之瀬君に無償に言いたい事が出てきて、ポツリと呟くように小さな声を出した。

「この間からね、幸と話ができないの？」

「……」

「ずっと話しかけても返事をしてくれない。もういなくなっちゃったのかな」

一之瀬君からの返事はない。もしかして怒らせたのかもしれない。

でもあたしは構わず言葉を続けた。

一之瀬君は幸がいなくなつて悲しいんだよね。でもそれはあたしも同じ。幸が連絡を取ってくれなくて悲しい。唯一の味方がいなくなつたように感じる。

出たくなかつた表の世界に強制的に追い出されて、何も分からないまま現実に向きあわされた。

幸が今どんな状況下は分からない。もしかしたら本当に消えてしまつたのかも……

「幸はあたしを怒つてきた。すごく怖かつた……あたしはまだ外の世界に出る勇気がないの」

「は？」

「だから話しかけて元の暗い世界に戻りたいのに、返事をしてくれない」

一之瀬君に言つたからつて何かが変わる訳じゃない、けど言わずには居られなかつた。

多分こんな事を言える相手が一之瀬君しかいないからつて言うのが大きいんだろうな。お母さんには言えないし、学校の人に言つたら、それこそ気味悪がられる。

でもこれが今のあたしの本心だから。表の世界は怖い。何も分からないのに、こんな場所に行かされて、家に帰ったら週4でリハビリ施設に行つて病院に行つて……ハッキリ言つて充実しているとは言い難い。

そこまでする価値は自分には無い。

空白の時間が長過ぎた。幸に体を預けすぎたんだ。

小学生と同じくらいの知能しかあたしには無い。それもそうだ、だつてあたしは小学生の時に幸を無理やり表に出して隠れてたから。今更学校の勉強なんて分からない。しかも高校の勉強なんてチンプ

ンカンブン。

ただ幸が高校で友達ができたから、友達と過ごせたらいいだろうって言う母さんと先生の気遣いで、あたしは今高校に行ってる。

勉強はリハビリ施設で小学生の勉強からやり直し。こんな人間に皆何を期待してるんだろう。

頑張っで、だなんて言っでほしくはない。生きて、とも言っでほしくもない。

何を言っでほしいかなんて自分でもわからない。でもただ分かるのは……

「じゃあ戻れよ」

「え？」

一之瀬君の冷めた言葉に顔を上げた。視線の先には怒りを抑えきれない表情をしている一之瀬君がいた。

ああ、怒らせてしまったんだな。瞬時にそう感じたけど、謝ろうとは思えなかった。

なぜだか、このままでいいと思った。

「戻れよ。自分の中に、幸を表に出せばいいだろ」

「一之瀬、君……」

名前を呼んでも返事が返っでくる事は無い。唇をかみしめて怒りに震える彼の脳裏にはきつと幸しか映っでいない。

なんだ、一之瀬君もやっぱり比較してゐるんだね。

気持ちが妙に冷めて、頭の仲がクリアになっでいく。でも何も考えたくない。

でもね、一之瀬君が何を考ゐてるかは手に取るように分かるよ。何も考えなくてもね。

「俺と幸がどんな思いでいたかあんたは知ってるのか？幸は消えた
くないって泣いてたんだ。でも頑張ろうって2人で決めてたんだ。
なのにあんたはそれをあっさり奪ったくせに他の奴にばっか変化を
求めて、自分は変わろうとしない」

「……」

「石原達が話しかけてるのに倉田さん返事すらないだろ。それな
のに周りに馴染めないとか甘え過ぎなんじゃないのか？」

「だって……」

「俺は正直、こんなことになるなら、ずっと幸のままでいてほしか
ったよ」

それが一之瀬君の本心だった。あたしに消えて幸に出てきてほしい
って。

それはそうか。幸の彼女だったら当然だ。彼女の文句を同じ姿の奴
から言われたら腹が立つてもおかしくない。

目から涙がこぼれた。心臓は全く痛くないのに。

悲しいなんて事は微塵も思わない。もしかしたら、あたしはどこか
でこの展開を期待してたのかもしれない。

ボロボロに否定されて、消えてほしいと言われる事を。

涙は出たけれど、不思議と悲しくは無かった。

だって私は誰かに否定されて、消える口実を探してたから。

18 少しずつ無くなっていく

あれから一之瀬君に話しかけてはいない。だって怒っている人に話しかけても逆効果なのは知ってる。

お父さんがいつもそうだったから。

でも一之瀬君の否定の言葉は、あたしにも幸にも胸の奥まで響いたはずだ。

18 少しずつ無くなっていく

「あたしの子供の頃ってどんなだった？」

不意に聞いた言葉にお母さんの目が丸くなるのが視界に入った。今まであたしは自分の事を何一つ聞いたりしなかったから。

でもお母さんに分かる訳が無いよね。だって幸と一緒に過ごした時間の方が長いんだから。

あたしと過ごしたのはたった6年と数カ月。10年近く過ごしてる幸の方が思い出が多いのは必然。

でも母さんは少しだけ笑って幼い頃のあたしを言葉で例えた。

「泣き虫だった」

「泣き虫？」

「そう、欲しい玩具があったら泣いて欲しがって、少しでも嫌な事があったら泣いて怒る。泣かなかった日をカレンダーに印つけてやるうかなって思ってた」

でも確かに良く泣いて困らせた気がする。泣いたら助けてくれた

から。大声で泣き叫んだら、お父さんの暴力がなくなる事があったから。

泣けば済むんだと幼いながらに思っていた。子供の特権だ。でも幼いあたしに楽しい思い出なんてあまりない。全て父親のせいで壊されていく。

お母さんもこれ以上何も言えなくなってしまったのか、そのまま言葉をつめた。まあそうだよ、口に出したくはないよね。

「ねえ幸、お母さんを恨んでる？」

「どうして？」

「あなたが辛い目に遭ったのはお母さんのせいだから……」

恨んだらどうかなるんだろうか。失くしてしまった10年余りを取り戻せるんなら喜んで恨み続ける。

でも時間が戻る事はないし、お父さんが優しくなる事は無い。何も変わらないんだから無駄にエネルギーなんて使いたくないのが本音。あたしはお父さんが耐えられなかったけど、幸はそれに耐えた。だから幸が全てを手に入れた、それだけ。

少しの嫉妬や羨望は混じるけど、幸はあたしよりも立派でしっかりしてる。文句のいい様も無い。

あたしの事を気にかけて、友達も作ろうとしなかった。口では何とでもいいながら、あたしに10年も平穏を与えてくれた。そんな幸にあたしは何も返してあげられない。

「別にお母さんの事恨んでない。恨んでも過去は変わらないから」「そう……」

そう、何も変わらない。

この部屋が幸の匂いで満たされているのも、幸の好きな色でコーディネートされた部屋も、幸の好きなぬいぐるみで囲まれたベッド

も、幸しか映っていない小学校と中学校の卒業アルバムも、何も変わらない。

そこにあたしがいた形跡は1つも残っておらず、また幸で埋め尽くされた空間にあたしが新たに自分の物を置くのは躊躇われた。

幸の空間を崩してしまっ、そんなこと誰も望んでない。そう思うだけで、新しい物を買う気力は無くなった。

結局幸のお古を使い続けるあたしは、もしかして幸と同化してきたのかもしれない。

少しずつ自分の中の何かが無くなっていく気がする。最初から自分は何も持っていなかったけど、持っていないの何かが無くなっていく。

家族だったり、知能だったり、玩具だったり……逃げた自分が悪いのに。

だから決めたの。ずっと考えてた、一之瀬君に言われてからずっと本当に望まれる結末。あたしが救われる方法。それを全部考えた。

そして1つの結末に辿り着いた。客観的に見れば、自分には何のメリットもないけど、あたしから見れば、これが最高のハッピーエンドなのだ。

「お母さん、有難う」

「幸？」

「あたし、病院に行きたいの」

それだけ告げたら、お母さんは理解したみたい。顔を真っ青にさせている。でももう決めたから、考えをかるつもりはない。

必死で止めてくるお母さんを見て、愛されてる事を自覚した。

でもあたしの決意が固い事を知ったお母さんは説得を止めて病院に電話をかけた。これですべて終わる。

自分の部屋に行って荷物をつめる。もうこんな部屋とはおさらば。一生帰ってきてやるもんか。

勝手に幸せになっちゃえばいい。あたしがこんな劣等感を感じてしまっから、いない所で。

この部屋に思い出なんて1つもない。あつても無くなってしまう。昔と今は違いすぎるから。やっぱり10年の月日は長過ぎたんだ。全てを変えてしまっ。

だからもういらない。こんな部屋いらない、グッズも何もかも。全て清算したら全て新しく一掃してやろう。

壁紙も変えて机も自分なりにカスタマイズしよう。ベッドだってシートを変えて、このグッズは全部捨ててやる。それで自分の好きな物で埋め尽くして行こう。

そんな未来が来るかは分からない、きっと来ないだろうけど。

でもこの部屋にいる必要がなくなるといふ事実が嬉しくて仕方が無かった。

次の日、学校を休んで病院に向かったあたしを後藤先生が迎えてくれた。

お母さんは仕事があるから、終わってくるみたい。1人になれる時間が長いのは嬉しいのやら悲しいのやらわからない。

でも仕事に向かう前にお母さんがあたしに振り返った。

「幸、自分の好きなようにしなさい。貴方でも、もう1人の貴方でもお母さんは今度こそ1から愛して見せるから」

「うん、ありがとっ」

去り際にお母さんが目じりをぬぐったのを目ざといあたしはすぐに目についた。

お母さんは災難だろうな。こんな子供持つて。

でも心配しないで、今度こそ全て終わらせるから。どんな結末になっても、今度こそしっかりと前を向いて人間らしく生きるから。最後の対面なの。

後藤先生が中に入るのを促す。あたしはその後についていった。

最後の時は少しずつ近づいている。

全て無くしたら、また1から手に入れるから。

19 夢想少女

「幸、幸、起きて」

真つ暗な空間の殻の中に閉じこもって何日経ったか分からない。

ここでは時間の感覚もない。お腹がすく事もない。泥のように眠っていれば、いつの間にか知らないうちに時間が立っている。

確かにこの生活は不便なんて無くて、何も考えなくて良くて、とても楽だ。

それでも、あたしには心残りしかない。

19 夢想少女

この声は幸だな。またしつこく話しかけてきて……

幸が話しかけてくるのは今に始まった事じゃない。それこそ表に追いついた時は頻繁に話しかけてきた。もう10分に1回くらいのパターンで。

応えてあげないのは少し意地が悪かったかもしれないけど、あたしなりに心を鬼にして幸の事を見守ってた。って言うのは美化しすぎか。

本当は悔しかったから。幸を見たら、自分の中の汚い感情が渦を巻いて出てきそうだったから。

その感情で幸を再び気づ付けてしまわないかがすごく心配だった。それだけが不安だった。

だから今回も無視してやるつもりだったのに、あまりにも必死な声に応えない訳にはいかなかった。

だってこれがもうずっと続いている。時間の感覚が分からないから、どれだけ続いているか分からないけど、ずっと続いているから。仕方なく起き上ってまっすぐ前を見れば、全く同じ顔のあたしが立っている。

泣いてるかと思ったけど、どうやら泣いては無いみたい。見た事ない様な凜とした表情をしていた。

それほど何か大事な話があるんだろうか。思わず息を飲んだあたしの隣に幸は腰かけた。そのまま体育座りして、ただ俯いている。

「……人を起こしておいて何？マジ安眠妨害」

「ごめんね。でもハッキリさせなきゃって思ってたさ」

ハッキリさせる？何を？あたしたちの間に何をハッキリさせるって言っの？

もう全て終わったんじゃない。あたしはこうやって眠っている内にきつと消えていく。幸はそのまま現実世界で生きて行く。

大丈夫、現実世界では助けてくれる人がいるはずだ。

母さんに春哉に後藤先生、それに石原達も。あんたが怖がる必要なんて何もないんだよ。

あんたが笑って“おはよう。ありがとう。ばいばい。ごめんね”それだけ言えればいいんだよ。自分から話題出すとか難しい事はまだ考えなくていい。

挨拶と感謝と謝罪さえできれば、コミュニケーションは最低限成り立つ。まだあんたはその段階でいいんだから。何を悩む必要がある？

「幸、あたし考えたの。あたしは何のために存在してるんだって」「え？」

「今更体を手に入れても、あたしには何もない。知能も常識も何もかも……体だけ成長して中身は小学生のままなの。感情のコントロールだってうまくできるか分からない」

「幸……」

「でもそれは全部逃げた自分のせいって分かってるから、誰を責めるまでもない。でもね、そんなあたしの為に今まで頑張ってきた貴方がこうして不幸になるのはどうかなって思った」

今日の幸は凜としてる。少し情けないのは変わらないけど、でも今までよりは格段にしっかりしてる。ううん、何かを覚悟してる。そんな感じた。

ねえ、幸は何が言いたいの？

「何が言いたいの？」

「……幸、ちゃんと話しあいしよう。恨みっこなしで。どっちが表に出るか、どっちが消えるか」

どっちがって……そんなの決まってる。表に出るのはあんだだよ。それは確実なんだよ。

だってあんなが先の本人格、あたしは後から出てきた二重人格。そんなあたしが表に出ていい訳が無いじゃない。あんなが出てこそ倉田幸じゃん。

あたしは倉田幸の代理を務めてただけ。あんなの代わりをあんなが返ってくるまでやってただけ。

少しだけ好き勝手にやらせてもらったけど、そのルールはちゃんと遵守するよ。

「あんなが出なくてどうすんの？あんなが本人格じゃない」

「ねえ、本人格って何なの？それは誰が決めるの？先に出てきたあたしが本人格なの？それとも倉田幸として過ごしてきた時間が長い貴方が本人格なの？」

「それは……」

「あたしね、貴方になりきらなきゃって思ったの。貴方になりきら

なきや誰にも好かれないうて。でも貴方と比べてしまうから、そんなことするなうて怒られちゃった」

それは誰の事言ってるの？母さんに言われたの？

幸は悲しそうに笑ったけど、泣く事はなかった。いつもビービー泣いてたくせに、なんだか幸も大きくなつたなあ。無駄に親心にそう感じてしまう。

「それに言われたの。幸を消してまで表に出たんだからしつかりしろつて。だから決めた。あたし、貴方との会話をこれで最後にする。貴方が表に出たら、あたしは綺麗さっぱり消えるし、あたしが表に出たら、貴方は綺麗さっぱり消えて。そしたらあたしは新しい倉田幸として生きる」

「それならあんたが表に……」

「それが幸の本心なの？幸は消えなくなかったんじゃないの？」

そう、消えなくなかった。まだまだ倉田幸でいたかった。春哉とたくさん笑いあいたかった。春哉といっぱいどこかに出かけたかった。母さんといっぱい話したかった。いっぱいお出かけたかった。

石原達と修学旅行を回ったかった。短い10分休みにもっとたくさん話したかった。

やり残したことはいっぱいある。でもそれを叶う日は来ない、そう思ってた。でも幸は本心を言えうて言ってる。だからあたしはしまつてた胸の内を露わにした。

「あたしは……まだ消えなくなかった！まだやり残した事一杯ある！まだ倉田幸でいたい！まだ、まだ……まだ母さんや春哉に幸うて呼んで欲しい。あんたじゃなくて、あたしの事を！」

目に涙をためて声を荒げたあたしに、幸は表情を変えずに無言で眺

めていた。

初めて幸の視線が怖いと思った。幸は一体何を考えて何を思っ
て、あたしの事を見ているんだろう。

馬鹿な奴だって思ってるのかな、最低な奴だって思ってるの
かもしれない。

でも返ってきた言葉は全く別の言葉だった。

「さっさと言いなよ、すごく分かりづらい」

「え？」

「幸は消えなくなかったんでしょ？なににどうしてあたしを外に出
したの？」

「だってそれはあんたが本人格だからって言ったじゃん」

「そう言うの関係なくない？幸がそう思っても本人格は皆貴方だ
って思ってる。あたしね、言われてるの。つまらないって、いつも
みたいに突っ込んでって」

幸の目からこぼれた水滴に目が丸くなる。あたしは幸をどれだけ傷
つけてたんだろう。

自分ばかり嘆いてた？幸を一方的に追い出したけど、幸を受け入
れる体制を作ってなかった。その結果、目の前にいるもう1人のあ
たしは深く傷ついたんだろう。

「分かったんだ。10年は大きすぎた。どこにもあたしの居場所な
んでない。だから作ればいいんだ、そう思った。でももういいや」

「幸？」

「なんだか今ね、すごく悲しいけど嬉しい。自由になれるのは嬉し
いけど、もう少し頑張れたら結末は違ったかなって……」

幸の体が薄くなっていく。どういう事？まさか幸が消えるって言う
の！？

慌てて掴んだ手を幸が握り返す。

「幸せになってね。あたしが羨むくらいに……もうなってるか」

「幸、消えたら」

「消えるんじゃないよ。1つになるんだよ」

“ママと一之瀬君によろしく”

そう言葉を残して目の前にいたはずの、もう1人のあたしは姿を消した。実感が全くわかない。幸が本当に消えたのか、本当にあたしが本人格になったのか。

幸の最後の言葉が胸を深く傷つけて、暫く膝に顔をうずめて泣いた。

それから何時間その場にいたか分からないけど、あたしは意を決して表に出る事にした。

目を開けた先には真っ白な天井、そして傍には後藤先生がいた。

「先生……」

「君はどっちの幸ちゃん？」

「先生が良く知ってる方」

「そうか。明るくて元気な方の幸ちゃんだね」

その言葉が嬉しくて、あたしは先生に抱きついて泣いた。先生は「お帰り」とだけ言っで、ひたすらあたしをあやしてくれた。

どのくらい時間が立ってたのかな。あたしはまた取り戻せるのかな？何も分からないけど、幸がくれた残りの人生全てを悔いが無いように生きようと子供ながらに決意した。

何もかも取り戻すのが遅くなってしまった。でもまだ間に合うでし

よ？

だって夢は幻想から作られる物なんだから。

20 終わらない恋になれ

目が覚めたあたしは、また暫く病院に入院を余儀なくされた。まだ精神的に不安定だからって。確かにそうかもしれない。だって今でも何も考えてなくても胸が痛くて涙が出たから。季節は12月に変わり、木枯らしが吹いていた。

20 終わらない恋になれ

「幸、そう……貴方が幸なのね」

初めて母さんと面会をした時、母さんは涙を流しながらあたしを抱きしめた。

もう母さんは前の幸がどうか、そんな事は言わなかった。2人で一緒に幸せになろうね、それだけしか言わなかった。

母さんはあたしと2人で生きて行くって言ってくれた。大切に育てたいって。

有難う母さん、その言葉だけであたしは幸せだよ。

「あたしね、幸と話したんだ。幸せになるって」

「うん、なろうね。絶対にお母さんが幸せにして見せるからね」

うん、あたしの世界の大部分は母さんから作られてる。学校の友達、そして……

思いだしたのは温かい笑顔、いつもあたしを包み込んでくれた優しい手、嫌味な事を全く言わない口。

春哉はどうしてるんだろう、春哉は今何をしてるんだろう。

あたしがいなくなつて幸せに生きてるのかな？それはそれで悲しいけど。

でも母さんの言葉を聞いて一刻も早く母さんに会いたくなつた。

「春哉君ね、一度家に來たのよ」

「春哉が？」

「うん、幸を助けられなかった事を謝りに……優しい子ね。だからね、待つてあげてつて言つたの。そしたら彼、ずっと待つてるつて」

涙が出た。春哉はあたしを待つてくれている。あたしなんかを……春哉は約束を破らない。今でもあたしを待つてくれるんだ。泣きだしたあたしを抱きしめて、母さんは優しく語りかけた。

「幸、今度は貴方が迎えに行かないとね。ずっと迎えに来てもらつてばかりだつたもん」

「うん……」

「もう余所見しないで真つすぐ歩けるね」

「うん」

「でも辛くなつたら後ろを振り返つていいのよ。母さんが迎えに行つてあげるからね」

「うんっ」

母さんに抱きついて、わんわん泣いた。

母さんの前でこんなに泣くのは久しぶりなのかもしれない。でも母さんは嫌な顔一つせずに、あたしを抱きしめてくれた。

ああ……あたしと幸は小さいころからずっと、この手の優しさに憧れてた。

やっと手に入れた。優しい絶対的な存在を……

その後はリハビリを頑張った。勉強だつて頑張った。そしてあたしが病院から出られたのは12月23。クリスマスイヴの前日だった。その日は夜遅くだったから、そのまま母さんと小さくお祝いをした。明日は母さんと2人でクリスマスを過ごす。そして明日、あたしは春哉に会いに行く。そう心に決めた。

12月24日に、あたしは貯まっていたメールを石原達に返した。すぐに電話がかかってきて、それに出た途端、藤田さんの感極まった声が聞こえてきて、後ろで石原達が速く変わられて騒いでる。藤田さんと会話をして、藤田さんは石原と変わった。

「石原？」

「倉田さん大丈夫だったのか？まさかの病弱設定？」

「そうだよ、あんたがあたしにストレスためさせっからだよ」

「……ごめん」

「ん？」

「俺たち倉田さんに酷い事知らないうちに言つてたのかもしれない」

悲しそうな石原の声。そうか、幸は学校で馴染めないって言つてた。多分、石原もそれを感じていた。石原はだからあたしに謝っているんだ。

でもいいんだよ。あたしはむしろ遠慮ない言葉の方が気が楽なんだから。

「違うよ石原、救われたのはあたしだよ」

「倉田さん？」

「有難う」

「……修学旅行さ、俺達同じ班になったから、1月学校来いよ。話し合わなきゃいけない事あんだからな」
「任せて」

その後にも石原の友達と軽く会話をして電話を切った。
修学旅行か……考えもしなかった。どうしよう、すごく楽しみだ。
そしてその前に足らなきやいけない事がある。

あたしは服を着替えて軽く化粧をした。一番好きな人に不細工な顔
は見せられないから。多分泣くだろうから、マスカラとアイライン
取れたらどうしようかな。

家に鍵をかけて外に出る。寒い風がむき出しの皮膚を攻撃したけど、
それすらも何だか嬉しかった。

春哉の家の行き方は分かる。何度も前を通ったから。

今日は終業式だ。春哉は帰るかな？それとも友達と遊んでるのかな
……あたしは息を大きく吸ってインターホンを鳴らした。
出てきたのは春哉のおばさんだった。

おばさんは目を丸くして、あたしに上がってくれと言った。

「ごめんね、春哉まだ帰ってないの。多分すぐ帰ってくると思うけど」

「いえ、いいんです。あたしもこんな時間に来たんですから、出直します」

おばさんが出してくれたお茶とお菓子を食べて、あたしは頭を深く
下げて立ち上がった。

おばさんは申し訳なさそうな顔をして玄関まであたしを送り出して
くれた。

そして歩き出したあたしに一言言葉をくれた。

「幸ちゃん、うちの息子をよろしくね」

「え？」

「春哉は貴方がいないとどうしようもないから。ふふ……こんな可

愛い子連れて来る日が来るなんて思わなかったわ」

「春哉はあたしに勿体ないくらい格好いい彼氏です」

「有難う、お世辞でも息子を褒められて悪い気はしないわ」

春哉は伯母さんにあたしの事を何かしら話してたんだろう。でもおばさんの反応から悪い事は行っていないみたいだけど。

春哉に会いたい、会いたい。

何回も心の中で念じた。電話をすればいいんだけど、直接声が聞きたかった、電話だったらあたしは絶対に電話口で泣いてしまうから。

「幸……幸……！」

聞きなれた声、あたしが大好きな優しい声。

振りかえった先にはずっと会いたかった愛しい愛しい彼が立っていた。春哉はあたしの前まで走ってきて肩を掴んだ。

どこにも行くなどでも言うように。

呆然としてたけど、春哉は何か思い出したように急に顔を真っ青にするもんだから何だか可笑しくてつい笑ってしまった。

「倉田、さん？」

ああ、あたしを幸と間違えてるのか。

なんだかどこまでも春哉らしい、優しいね本当にあんたは。

「えらい他人行儀だね春哉」

「さ、ち……」

「他に誰がいる？」

春哉の腕の力が抜けてアホな顔になってる。

ねえ春哉、話をしよう。ずっとしなきゃいけなかった大事な話。

「え、どうして……俺……」

「話があるんだ。行こう」

春哉の手を握って歩き出す。何も言わずについてくる春哉を人通りのない河川敷に連れていく。

河川敷にはキャッチボールをしている兄弟の様な子しかいない。ここならゆっくり話せそう。

河川敷に腰掛けて、少しだけ沈黙になる。

「幸……」

「ただいま春哉、あたしさ、精神病院にずっと入院してたんだよ。そこで幸と話し合った」

あたしから言わなきゃ。そう思って春哉の声を遮って、自分から言葉を発した。

でも話せば話すほど胸が痛くて、苦しくて、涙が出そうになった。

でも泣いたら駄目、駄目なのに。

幸の事を考えるとどうしようもなかった。あたしのせいで幸は消えてしまったも同然なんだから。もっとあたしが理解してあげてれば……

春哉に全部話して泣きだしたあたしを春哉は抱きしめてくれた。いつもこの腕に救われた。そして今回もこの腕に救われる。

春哉の肩が震えている、ああ春哉も悲しいんだな。ありがとう、一緒に悲しんでくれて。

「幸は消えた。あたしに身体を渡して消滅する道を選んだ」

春哉は黙って聞いてくれる。抱きしめる腕の力が少し強くなるだけで。

ありがとう、そうやって春哉は全てを聞いてくれる。そして受け入れてくれる。翻弄に春哉に出会えてよかったなあ、心肩そう思えるよ。

顔を上げて春哉の目を見つめた。少しだけ充血した眼も全て愛おしい。

「だから幸と約束した。絶対に幸せになるって」

「うん」

「……幸せにしてくれる？幸が羨ましがるくらいに」

「約束する。精一杯愛してやる。絶対に幸せにしてやる」

その言葉が欲しかった。幸せになりたかった。でもなれる、あたしでもなれるんだ。

春哉がいてくれる限りあたしは幸せだ。一緒に歩いてくれる人がいて、あたしを抱きしめてくれる母さんがいて、あたしを笑わせてくれる友達がいて……なんて幸せなんだろう。

「幸せにするよ絶対。今度さ、修学旅行あるんだぜ」

「知ってる」

「自由行動さ、一緒回ろうよ。もう幸が隠すこと何もないよ。幸は幸なんだから」

「うん、うん……」

「俺が知ってる幸だ。やつと手に入れた」

「あたしもやつと手に入れた……」

不意打ちで春哉にキスされた。そうか、もう拒む必要もないんだ。だって全てあたしの物だから。

羨ましかったらまた戻らせてあげてもいいよ幸。春哉は譲らないけどね。

恥ずかしくて笑ったら、春哉も気恥しそうに笑った。

終わらない恋になれ

「羨ましくなんかないよ。全くね」

どこかでそういう強がった声が聞こえてきた気がした。
実はあんたって強がりな奴だよな。

20 終わらない恋になれ（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます^^
2人に幸あれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4292n/>

幻想少年

2011年4月30日21時08分発行